二十四輩順拝圖會

越前加賀

二

二十四輩順拝圖會巻之二

目録

○越前之部

荒乳山

毫攝寺

誠照寺　称東乃場の由来

橘宗賢

東本願寺御坊所

興宗寺

細呂木鋸坂

三國乃湊圖

同松ヶ崎乃圖

敦賀の湊
気比明神社

陽願寺

浩雲寺

専照寺

本覚寺

柘植乃御旧跡

吉崎山

越前軍物語り
湯の尾峠

證誠寺

法先寺

真宗寺

西本願寺御坊所

九十九橋の圖

同松ヶ橋乃圖

嫁威谷の由来

加賀之部

篠生寺縁起
小松 本覺寺
しらべ川の圖
專光寺
白山の圖
醍醐村
志のとう
犀川
金澤東御坊
本誓寺
月津 興宗寺
松任 本誓寺
同 西御坊

以上

二十四輩順拜圖會巻之二

越前の國

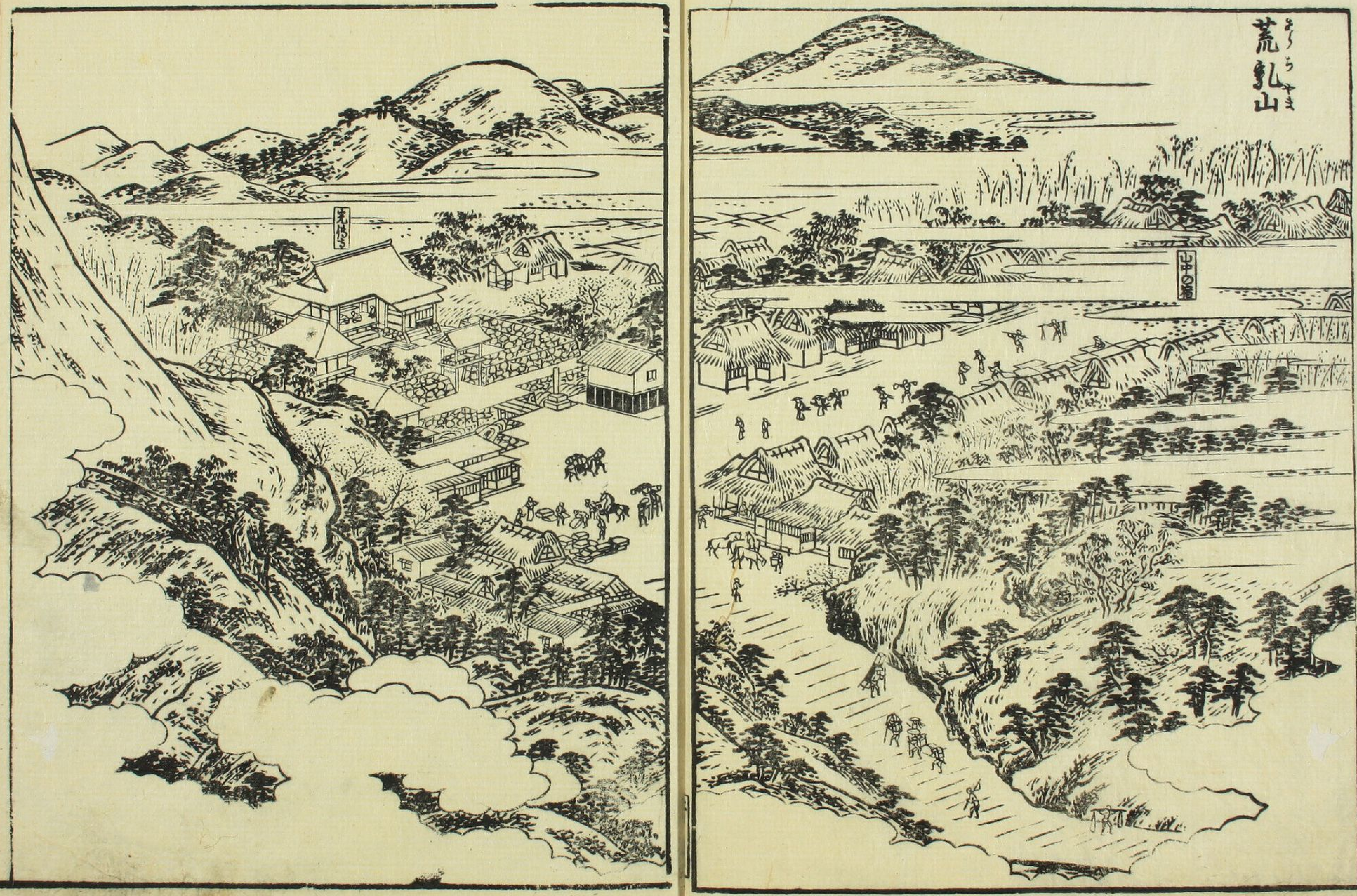
○荒乳山は近江と越前の境山中の宿にあり江州大物超勝寺より継程十三里余其昔親鸞聖人越國に左遷し給ふ御時此山の険しきになやみ給ひ

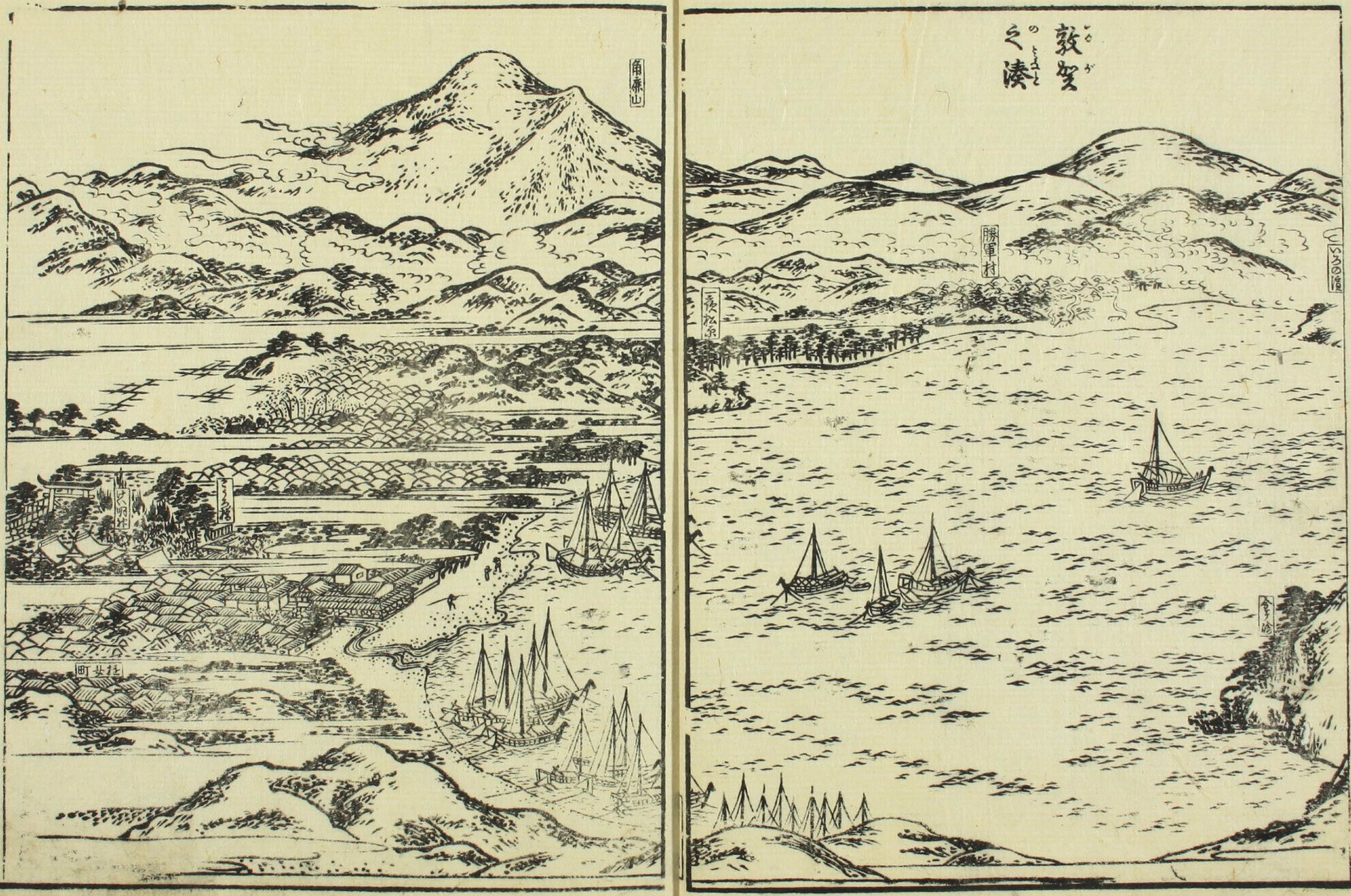
越路なるあらちの山に行つかれ足も血しほにそむる斗そ

と詠じさせ給ふ此御歌をみるにても其険難をしのぶべし今は都よりの往来繁く街道となりぬれば山を開き石を造り往来せるに容易し祖師の御在世は今を去る事六百余年田畠も海となり滄海も山と変じ今を以てむかしへを論ずるすれ

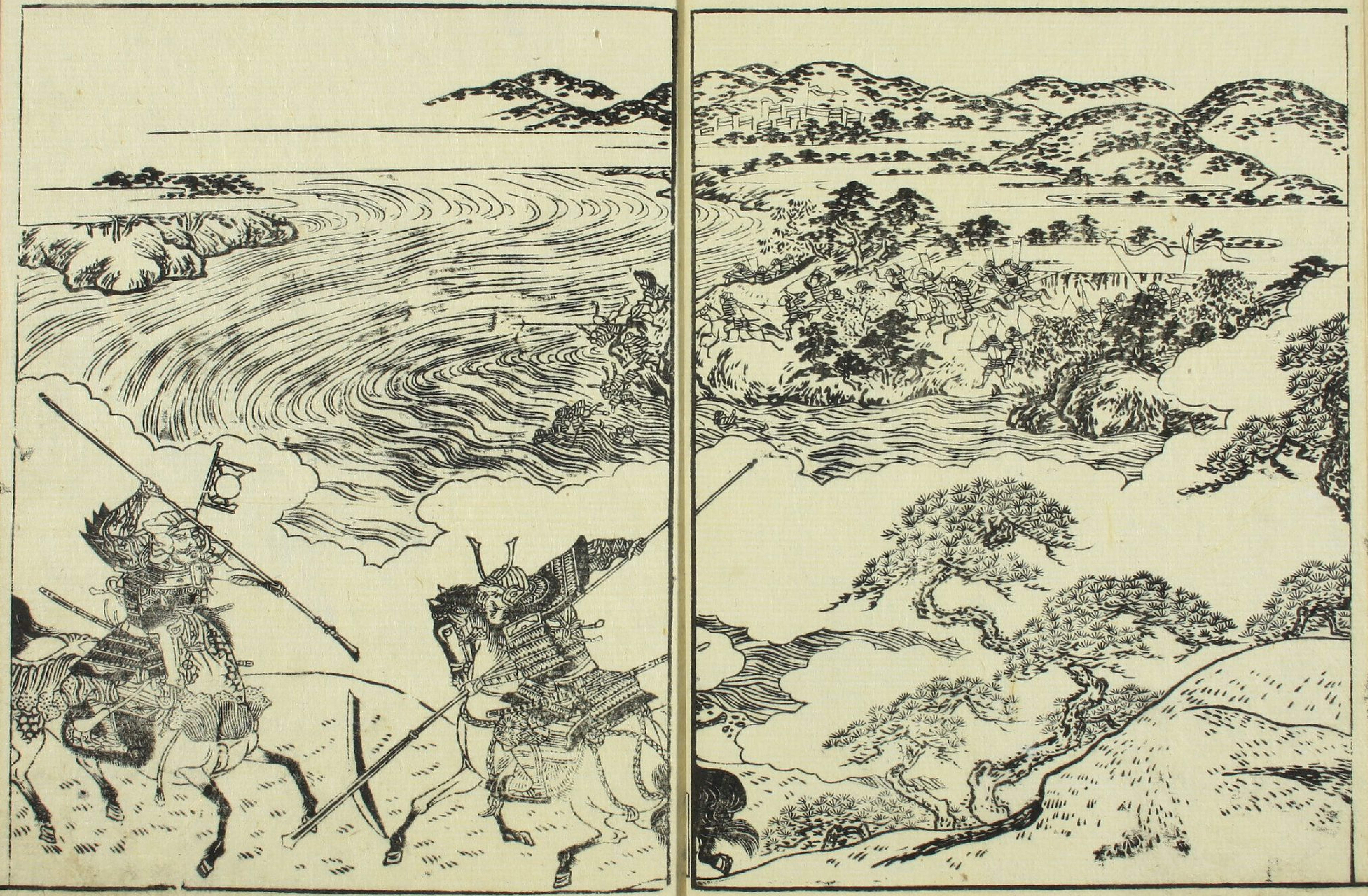
○敦賀郡 敦賀は荒乳山より行程凡二里ほどにて越前第一の繁花にて数多の人家軒をつらね諸都の商賈入往ひ交易をなす事むかしよりにてむかしへより此地には往古ありていとも賑しき大港之崇神天皇の御宇異國より貌に角生ひたる都怒我阿羅斯等といふ者此地に来りしより地名を角鹿と名づくといへり則今の敦賀なり

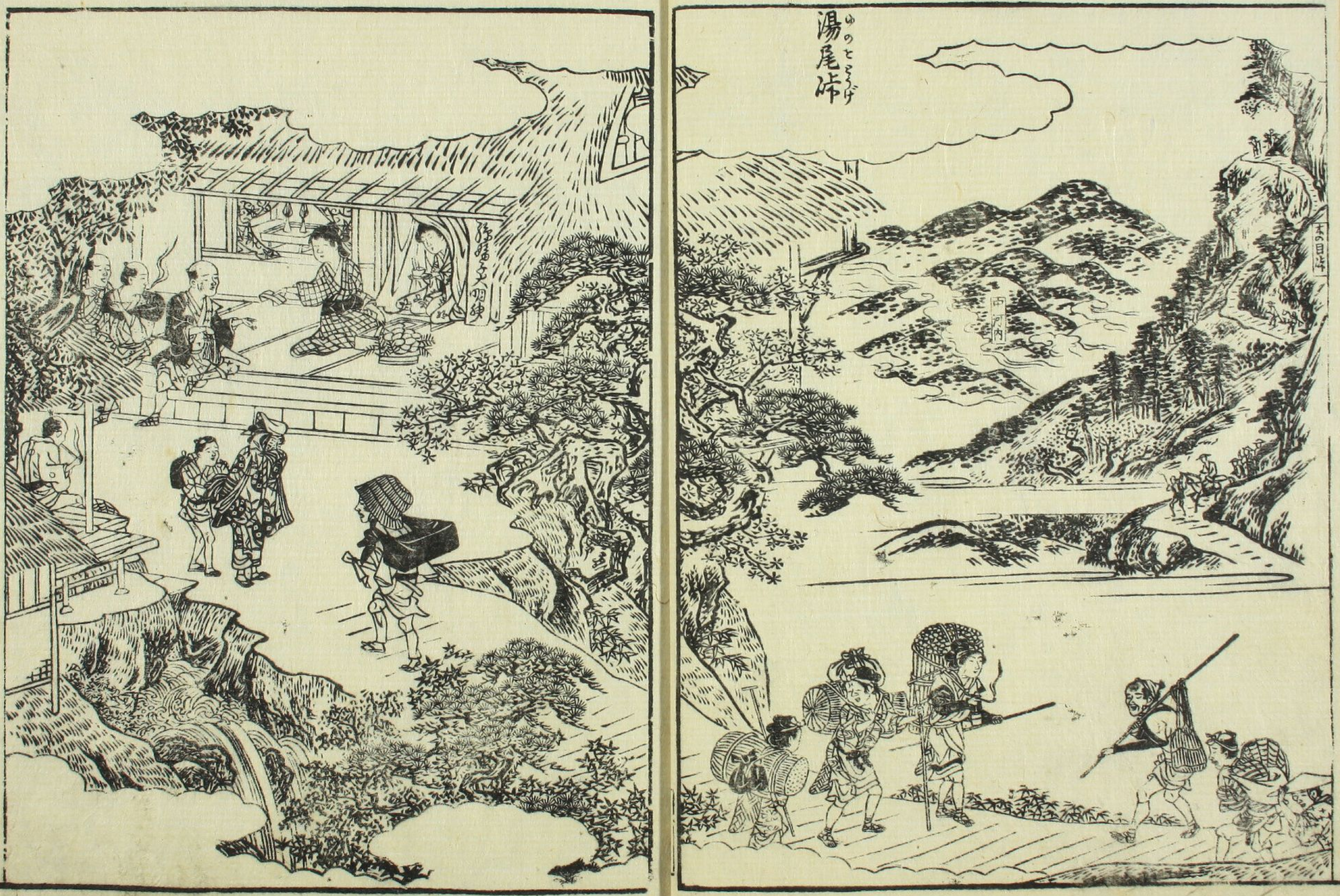
○氣比大明神の社は敦賀郡にありむかし仲哀天皇角鹿に御行給ひし時行宮を建させられ笥飯の宮と号け給ふ神は皇后十三年


荒乳山（あらちやま）
山中の宿


敦賀之湊
角鹿山
勝軍村
一夜松原
いろの濱

登田なる此行宮に拜し天皇を崇奉りて笥飯の神と称ひ奉り
給ふとぞ又万葉集の歌に
〽けひの海よそふはたらし舟の衆の乱出てみゆるあまの釣舩
〇敦賀より六里余今庄の宿あり夫より又三里余にして府中
あり昔蓮如上人加賀國獄の郷にて家に寓せられ遊び給ひし所なり
とぞ岩の窟屋中に六字の名号あり則蓮師の御筆なりと云伝へり
此事正しき傳記には見へず然ど里俗の妄説ならむとなれども因に
記して見る人の観に備ふ〇一向宗加州の国獄ならんや文明年中蓮如
上人北國を經廻し給ひ越前吉崎の地に一宇の道場を建立し給ひける
に國々の門徒多く老若を論ぜず男女群参し恭敬する事至て盛んなり
此宗風専ら當国に盛なり遂に門を踰て弥増り尓先元祖親鸞聖
人の御弟子真佛上人其弟子顕智上人の開基し給へ高田専修寺
の門流加賀越登越前の國に甚多く北國に於て昌ゆ加之蓮如上人
当國に下向し玉ひしより本願寺の門葉頻りに宗風を發し相争ひ
宗門の流近を汲むといへども門徒ら本願寺流高田流と流義を
立ち両流の門徒各互に我が家教賴の法論を起しける經に讒誹を
の中に於て合戦数度に及びけるが富樫國主へ訴へ出先非の裁許を
請ひけれども両宗專ら加賀の國主富樫政親に訴へ政親いふ



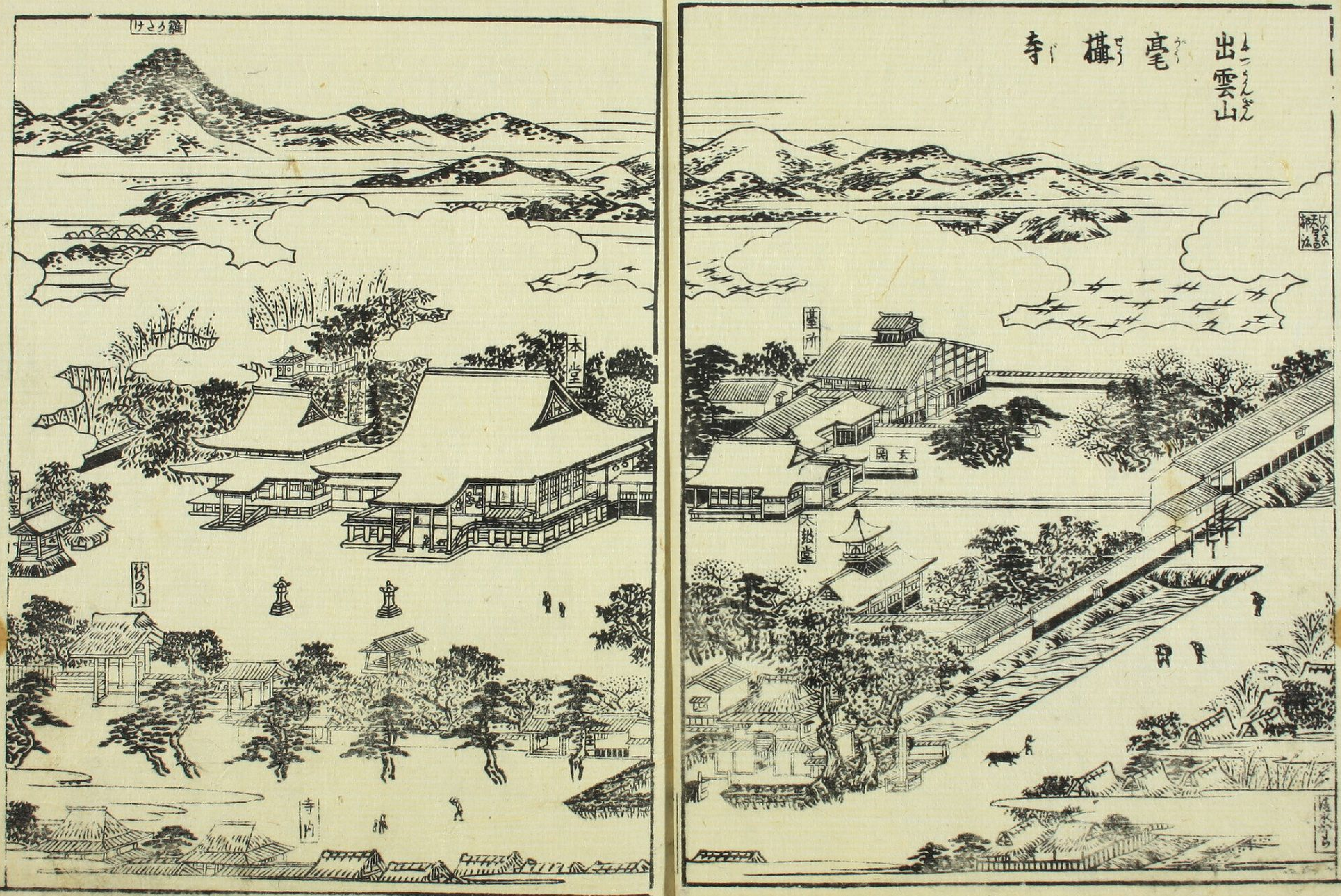

湯尾峠
ゆのをとうげ
孫嫡子大明神
木の目峠

かゝるうちや高田流に合体し本願寺流を滅さんと謀りしに終に
本願寺の門徒大に怒り此上ハ富樫の一族を亡さんと然宗門の法敵
なれバとて[illegible]せよとて郷民等忽一揆を企て加賀国ハ云に及バず
能登越中の門徒凡二万余り長享二年富樫政親が居城に押寄せ昼
夜となく戦ひ命を捨て責ければ富樫が防ぐ術も尽て城に火を
かけ自害して亡びにけり一揆等ハ勝に乗じ能登国を攻て能登畠山修
理大夫と戦ひ[illegible]破竹の勢ひにて越中とも切従へ忽ち越前に乱入せんと
其勢凡て六万余騎東くと[illegible]して雲霞の如く押よせたり此時越
前の国主朝倉弾正左衛門尉貞景元来蓮如上人を怨敵とし自身一揆
那をなりて吉崎の御堂を営ミしより企を少大きに怒りさしが一揆
共を伐殺せんとて舎弟小太郎左衛門教景を大将として家臣前波藤右
衛門堀江民部丞上田中村吉川ら同其外国中の軍勢を催し集め
都合一万八千余騎九頭龍河の川岸に陣をとり敵渡さバ渡へ戦ハんと手ぐ
すね引て待かけたり係る所に一揆の大軍六万余り鯖波を押して中角
の渡りへ押よせしが先ツ雄の若者馬をひさくと川中へ打入瀬ゐる所
と一文字に渡し財町の教正とかいへる大剛の荒法師黒衣威の鎧着て的
違の指物さし総鏡の馬を躍せ真先に進みたり朝倉が勇臣山崎長門
守吉家とこれをとくりしき一揆原が形勢かなと[illegible]

丈の長さ三尺あまりの大刃の鎗引さげて押[illegible]喚ひて突へかゝる所を
正元より無双の手利なれバ大長刀をもって討てかゝりし[illegible]
數度激戦に戦ひしがいかゞしけん教正が長刀折れより剰さく
ひるむ所を山崎透さずかけ寄って緋縅の鎧を一突に突通し組臥て
首を取たり一揆の大軍たのミ切たる教正を討せ今日の戦ひ墓なしとて
[illegible]捨てゝ我先に裏崩して逃出れバ朝倉貞景味方を下知して是ハや
ろうと真先に馬を討出せバ進ミ臨しも狩りべき鯖波一手面もふらず
村雲立ちる大勢を九頭龍川へ追落し首を取る名将の手柄とて実に此を
とゞ一揆の手始なれバ返し合せ共無く散々に加賀国へ引退しか
其後動乱の頃しかしバ蓮如上人深く悲ミ給ひ越前と吉崎の都の
へより引移り給ひしかども此所旧跡ハ此事戦の折こそや亡びけん黒谷の
まで残りたき旧記もかくれ

○湯尾峠ハ今庄と鯖波の間にあり孫嫡子の薬屋とて疱瘡の守を
売出る家あり

出雲山毫攝寺　今立郡清水頭にあり越州淡門徒にて本山の内一本山く
開祖ハ親鸞聖人にして創建開基ハ乗専大徳之乗専大徳ハ元
丹波国にありて佛心宗を修し六人部の邑に住ひ給ひたるが甚


出雲山
毫攝寺
本堂
臺所
天鼓堂
寺内

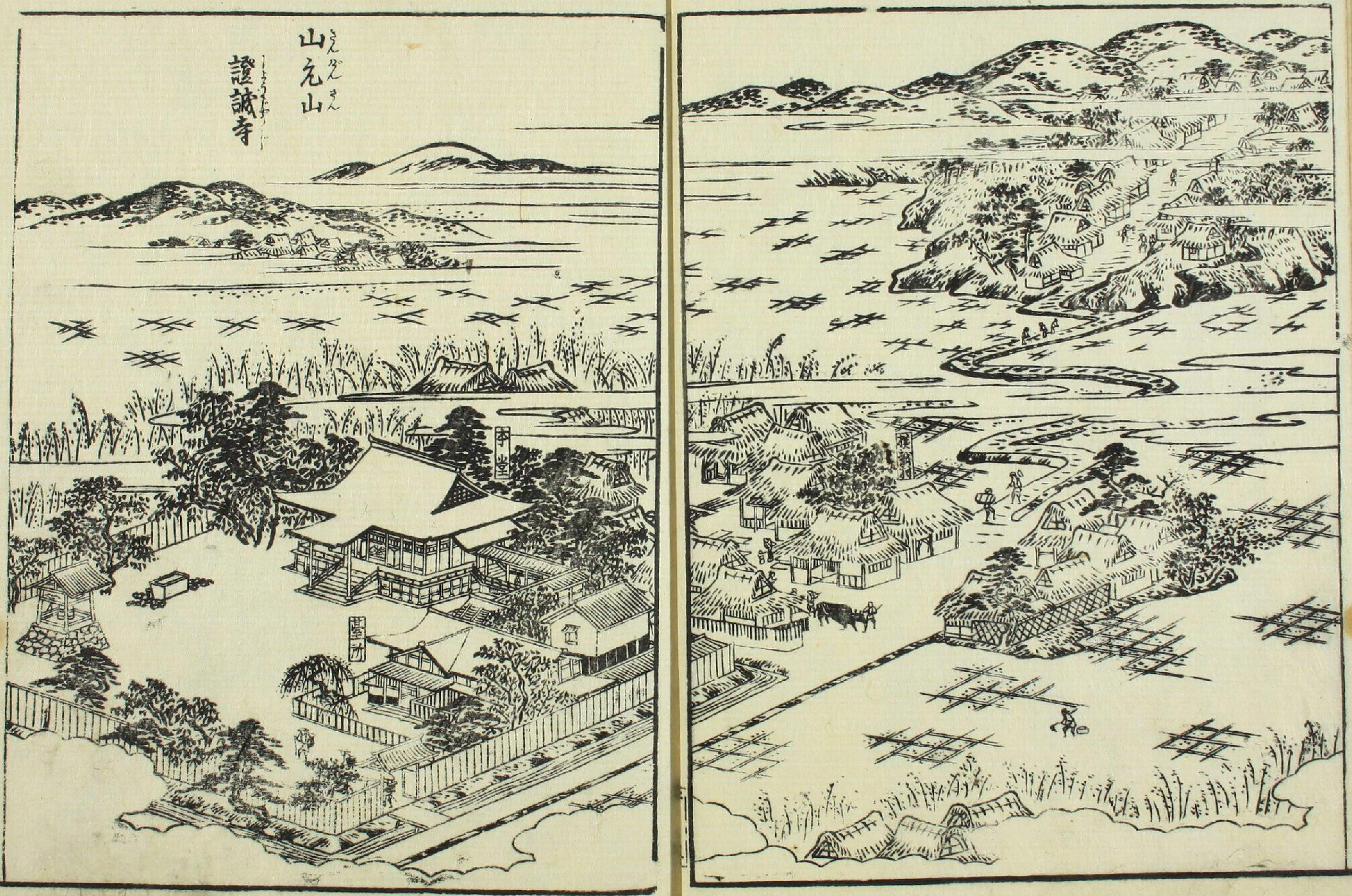
名高く海内に響きわたりされども雅りのさわりがたれ事を熟知して
遠に易行の大道に心ざし真宗に帰依し高祖聖人の法流をうけ都
入りたまへり 乗専大徳としめい 深範法眼と号す 始め丹州六人部に毫摂寺を開きたまへる
出雲路に移し再興して終に当国に基趾を開きたまふとなん此處
慕帰絵詞 釈覚如一説に善鸞上人を法脉の開基とするなり 未詳
記にこれをあらはせり
○金堂九間四面本尊阿弥陀如来 聖徳皇の御作 ○本堂十三間四面 高祖聖人
二十一歳御自作の真像を安ず 当山霊宝数品ありこれを略す

出雲山陽願寺 西派 御坊所 清水より一里余府中にあり

正闡房善鎮の開基にして本堂十三間四面聖人御自画の真
影を安ず○文明三年蓮如上人越前御下向の時毫摂寺の当
住正闡房善鎮蓮如上人に帰依し広瀬村岩坂といふ所に一宇を
建立せり蓮師其寺を陽願寺と号せしめ給ふ其後第三代善
海房の時府中の城主吉本紀伊守帰依によりて今此地に堂
宇を移すといへり什宝これを略す

山元山證誠寺 清水より一里今立郡横越村にあり俗に念仏道場と号く 越前門徒は本山のうち一本山なり

開祖親鸞聖人開闢の遺流にて本堂十三間四面本尊無量寿
仏は霊仏にして奇瑞不思議の尊像なり又高祖聖人御自刻の
像を安ず 光明本聖人の御筆 其外霊宝数品あり
開山聖人左遷の時越前の国脇山元といふ所に一宇を建立し
聖人を請し奉られけれど聖人即実に入らせ給ひ勧化利生あまね
く其後善鸞上人来護によりて門下を化益し給ひ続て奥州大
網の浄如大徳は仏閣を再興し忝くも 禁廷より山元山證誠
寺と勅号を賜はりそれより相続で今に法脉相承せり 維古八数寄 往昔接一人
口伝といふ伝法あり
ありといひ伝へたり


山元山
證誠寺
本堂
臺所

山元山證誠寺の勅号を賜ふ

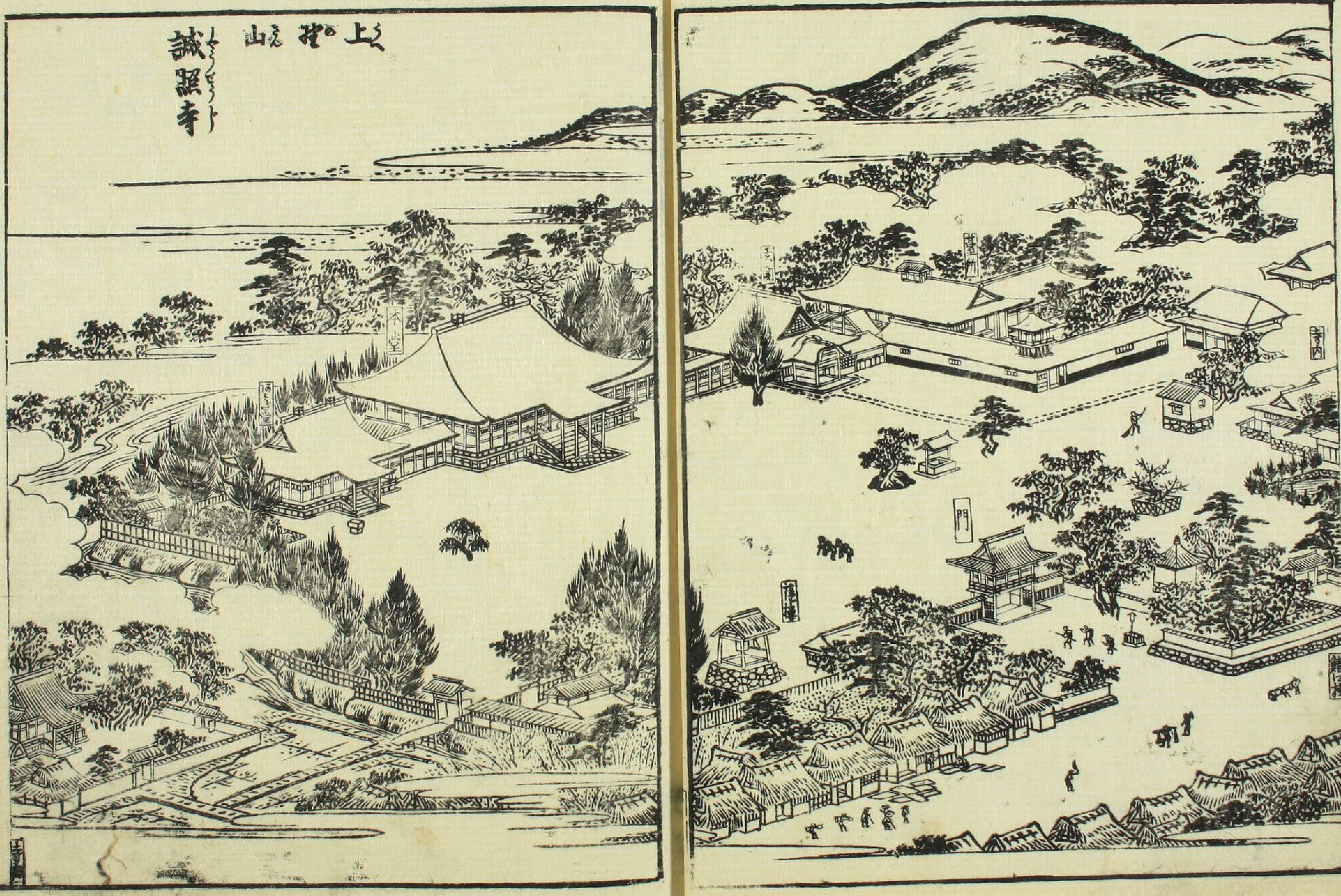
○世傳曰ゐ祖聖人越後へ御下向の時當國大町といふ所に如道といへるゐ徳の僧ありて聖人に謁しまつり聞法結縁して御弟子となりゐ門どもゝ専修念佛を弘む其後裔三ヶ寺と別れて鯖江誠照寺中野専照寺横越證誠寺これなり是を三門徒と称し家永の記にくはし　右傳記の異説後学これを正せ

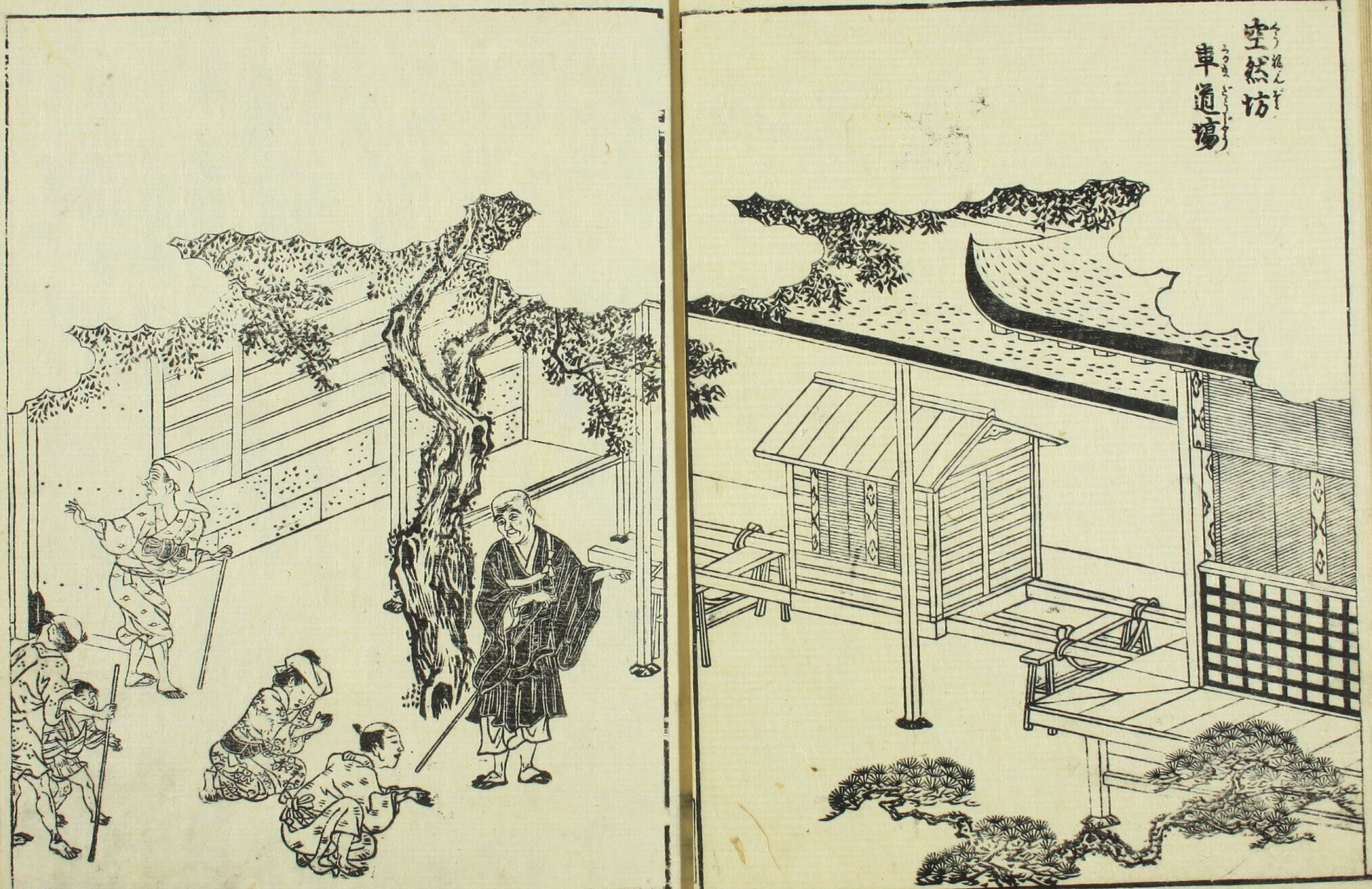
○左の方に愛宕山あり白鬼女川流れなり右の方の山際を丸生といふ即丸生判官が居住せしところなり

上野山誠照寺

横越より十二丁鯖江にあり　三門徒三ヶ院の内浄土真宗の一本山なり

寺務權僧正　本堂九間四面　本尊閻浮檀金弥引阿弥陀如来を安置す又如覚上人の像あり　御影堂十二間四面　高祖聖人の真像を安置す　鐘楼　三國○開祖は親鸞聖人創建開基は如覚上人也當山開闢は高祖聖人御在世の砌當地に波多野和泉守景綱といふ者あり聖人を深く信仰しまつり則招請して聞法結縁し喜悦のあまり終に御門徒となりては家に拘ひて聖人の孫弟道性大徳を請し移安を結


上宮山
誠照寺
本堂
門


空然坊
車道場

住せしむ其生る息男如覚上人也高祖化益の勝地を失ひ給し
て基趾を開き給ふ所之とぞ　当山乃傳に云往昔当国上越の
鈴木秦右京進景之元久二年正月七日の夜霊夢を感じ上洛
して親鸞聖人の御弟子となり空然と号し去るに聖人越後へ
左遷の御附空然入道兼て新殿を営み在て聖人を請し奉る
聖人爰に数日滞留して教化なし給ひ是より越後へ下向まし給ひ
ぬ空然房此新殿を聖人の輿車を止め給ふ所なれば東の道場と
号して是を守る又法流大に繁栄して国郡に充り聖人御帰洛の
後即聖人の御息弟又男有房を招請して是を道性上人と號し
空然房の息女と媒嫁して東の道場に住ませしむ其息を松壽と
号けしが弘長二年の初冬上洛せしめて聖人の真弟子となし法名
を如覚と号せり此如覚上人嘉元三年に参内ありて後二條院より淨
土真宗浄興寺と勅号を賜り其後水尾院勅願所と成し給ひ
上越山浄興寺と勅書を賜ふ當山境内寺外の御朱印あり後ハ
大僧正に任ぜられ上洛の毎に参内すと云　○越前国にての本寺
といふハ○清水頭毫摂寺○横越證誠寺○鯖江誠照寺○中野専照
寺これを四本山と号くいづれも親鸞聖人の法脈として真宗相
承の霊院なり

○鯖江と浅水の間に為称法寺あり高祖聖人御真筆の御影を安ず

高田山法雲寺　東流

鯖江より又里　足羽郡大味浦にあり

法雲寺ハ高祖聖人の上足真弟専空大徳当国熊坂といふ所に
下向して教導し給ふの遺跡也去るに真佛上人乃御門弟三州
和田の円善大徳の弟子如道法師当国大町乃東屋道場と云ふ所
に在て教化なさるゝ彼熊坂乃草庵を此東屋道場に移して大町

專修寺と号し應長元年五月の比覚如上人当國御下向のころ如道法師覚如上人より敎行信證の傳授を授り益法化盛んなり其後蓮如上人当國吉崎に御住在ましける时專修寺兵火のために回禄せり其後又同國風尾に再建せしが是又退轉に及びぬ再三今の大味浦に訖立して法雲寺と改号すといふ　或説聖人御自画修法の御影と称するあり鑑に御の筆てみてこれも聖人の御流を汲たまふところなり

○如道法師の傳異説區々之聖人の真弟ともいひ又三州和田の圓善大徳の門弟なりともいひ修行の半途道場の主鯖江誠照寺の發端ともいふ何れか是なるを知らず

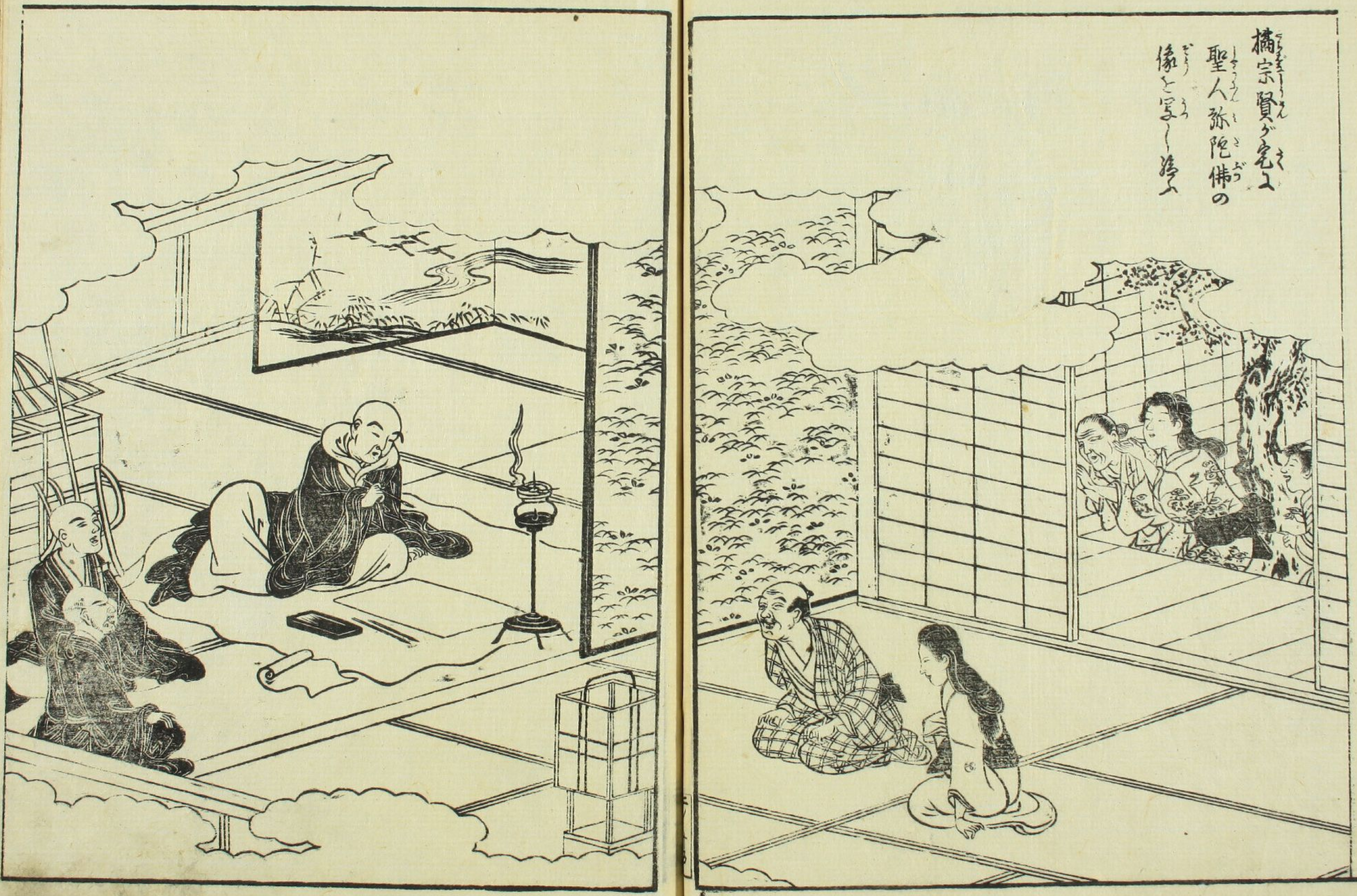
集手山法光寺　大味浦より六里岩倉にあり

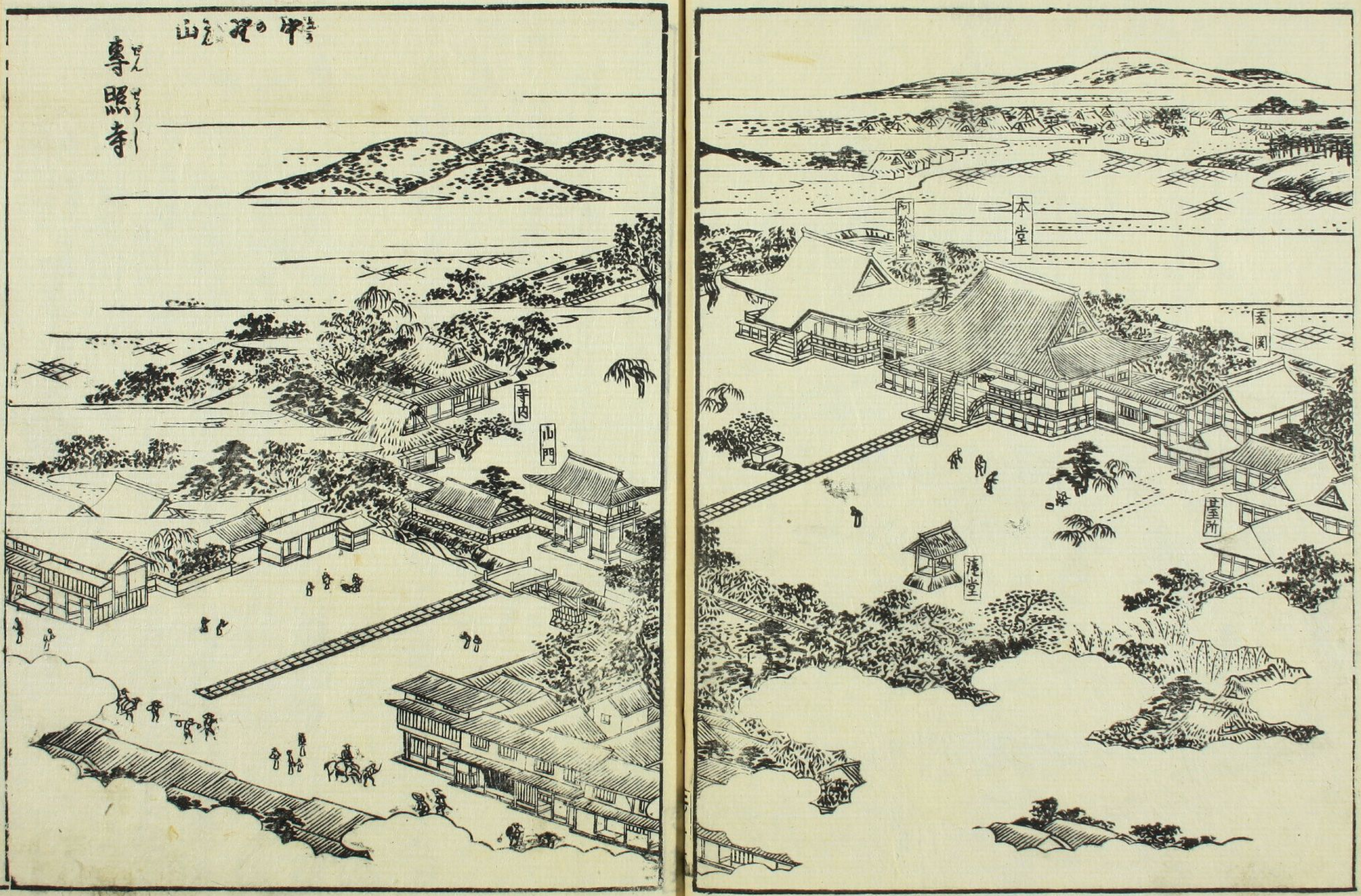
当寺は真宗桐巻乃一本山勢州一身田高田專修寺御門派の末寺也佐々木三郎光實入道法善房造立の寺なりといへり

福井橋立真宗寺同系乃寺なりとや○什宝には高祖聖人乃御木像○上宮太子御木像○来迎如来　恵心僧都御筆

橋宗賢　岩倉より二里福井本田町にあり

此御旧跡在家たりといへども其姓氏正しく先祖は聖武皇帝の皇子橘諸兄公乃正統也故に禁廷より醫薬の倫旨を賜ふといへり承元元年三月親鸞聖人越後へ左遷せられたまふ御附此家に寄宿在まして御教化ありしに主深く依渇仰の余り御弟子となりて法名を了善と賜り御真筆弥陀乃画像を授与し給ふ其外法物三五種今猶傳来せりといへる橋庄三郎左衛門といひし元俗の家にして六百余年退轉なく相續せるもいとも難し○宝物には弥陀佛の画像　聖人の御真筆光明の内に化仏十八体の化佛各蓮座あり如信上人覚如上人名御跡をそへたまへ○十字名号　聖人の御真筆○記念名号上へ六字


橘宗賢が宅に
聖人弥陀佛の
像を写し給ふ



中野山
専照寺
寺内
山門
阿弥陀堂
本堂
玄関
臺所

名号 蓮如上人の御筆 ○實如上人の御書

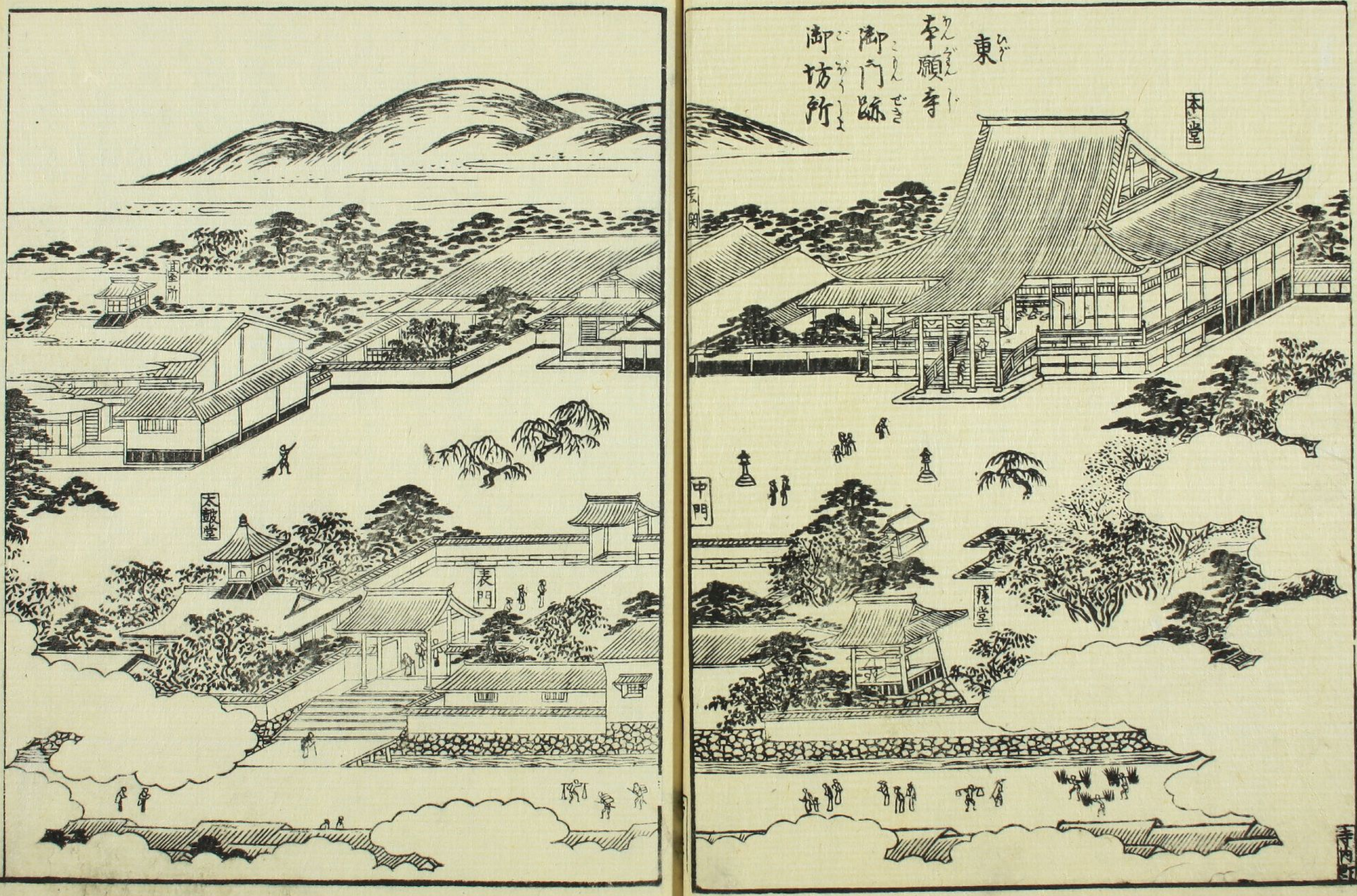
中野山專照寺 同所海岸本田町にあり

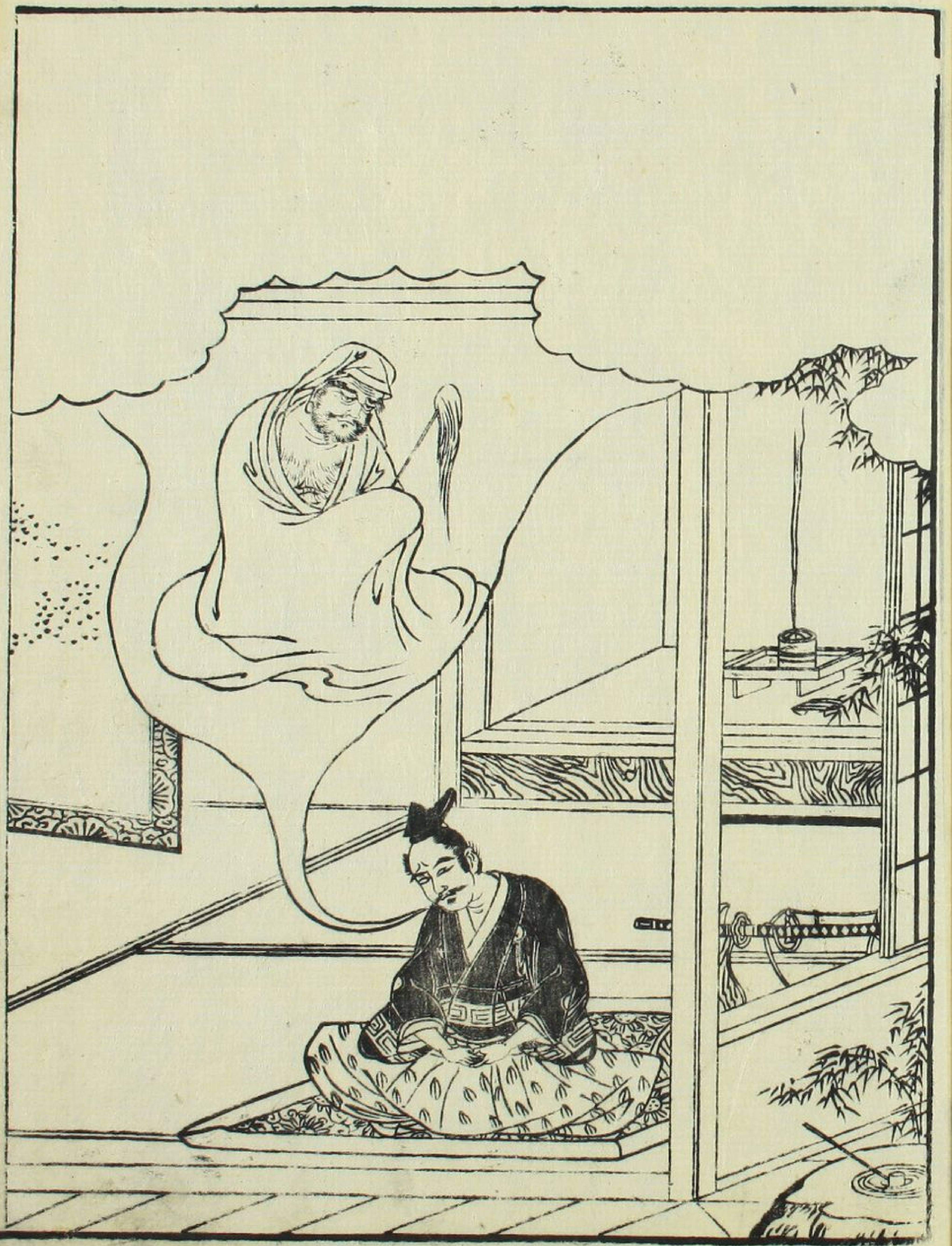
當寺も又越前にて本山の内真宗福井の一本寺也本堂七間御影堂十二間本尊阿弥陀仏の立像は春日の作にして俗に謂如道大徳の開闢にし霊場也前に記せし如く初めは大町といへる里に在道場といへるあり如道上人爰に住して教化ありしより人皆大町の如道大徳と称せしとぞや彼車在道場のことは既に前に記せり○霊像は高祖聖人御真影○法然上人の御木像○如道上人の木像等あり

橋立昌向山真宗寺 西派浣家 同所海岸にあり

當寺は往昔佐々木三郎盛綱祖師聖人の御弟子となりて開闢ありし寺なり本堂十間にて面本尊阿弥陀如来は聖人の御真作○抑佐々木三郎盛綱は人王五十九代宇多天皇の後胤近江の源氏佐々木源秀義の三男也勇猛強勢にして万夫不当の武士なりしかば元暦文治の頃武将源頼朝卿の幕下に従ひ舎弟同じく高綱と共に木曽を追討して平家を亡し武名海内に響きし高綱は宇治の早瀬の先陣に其名を遺し盛綱は西海藤戸の波上を先駆して英名を源平両陣の中に輝かし終に源氏一統の世となりし後盛綱は今ハや衰老の身となりて去来のことを思ふに實に盛んなりし平家二十余年の栄花も只一睡の夢となりて今又源氏世に蔓りて栄を極むといへども飛鳥川の淵瀬定めなき世なれば身も壮んなる時は鬼神をも欺き大山も崩くばかり勢ひありしも衰老の今になりては眼を遠くに写しかも杖に借るの外なし出息入息不

侍命終今にも命終ば地獄に堕せんこと必定なり嗚呼いかにし
て後の世の苦みを免んやと昼夜是を悲み歎きけるに或時善
知識のいはく聞法の縁を勧め迷ひの夢を覚さんものと思ひつ
けておもふるが盛綱宿善の時いたりけるにや親鸞聖人越後
に在まして弥陀の本願を弘通し給ふよしを聞及び直に彼国
に赴き聖人に謁しまゐり御教化を願ひやせしかば聖人盛綱が
発起の心を感じ石船と歓び給ひ汝は海乱世の時に生まれしうへされ
ばひとへに若年の昔より衰老の今に至るまで多くの人を殺し
罪業を作る事深重の地獄必定にして遁るゝ期更にあるべからず然れ
ども今阿弥陀仏の本願を海ずるは五逆十悪の凡夫を救はせ
給はんが為の悲願なれば我身の罪深きを顧ず只一心に仏の大
悲願を信じなば我後世の一大事御助けあると深く如来を頼
ませば弥陀仏は忽遍照の光明を放ち給ひ汝が身を彼光
明の中に納めえて再び捨給はじ命終の期に臨んでもとくやうに
安楽浄土に迎へとり給ふ誠に広大不思議の仏恩を報ぜんが
ためには余念なく一心よりいづる称名念仏して命終を期とぞ
應じゆめゆめ疑ふ事あるべからずと具さに御教化遊ばし給ひ
ければ盛綱忽ち歓喜の涙にむせび直に他力信心を決定して終に
聖人の御弟子となりまゐりて聖人則法名を法善坊光実と授け
給ふ其後法善坊当国橋立に一宇を建立して真宗寺と号し
高祖聖人御真筆十字名号を与へ給ひ今にその名号を安置
せらる○一説に法善坊光実は佐々木盛綱の玄孫にして
佐々木三郎光実なり親智坊の門弟にて当国に化導し橋立
に一宇を建立し竟に正元元年七月二日に寂したまひけるとぞ


東本願寺御門跡御坊所
本堂
中門
表門
太鼓堂
寺内町



是ならずを知らじ　霊宝ふは髙祖聖人御真筆十字名号
上宮太子尊像　光実画像　髙祖聖人蓮如上人対座之
御影

東本願寺御門跡御坊所　福井城下にあり

和田本覚寺　西派浣家　門末となり

本堂十間四面聖人御自画の真影を安置せり　髙祖聖人
の御直弟親性房開基の旧寺にして両聖人御譲の法物並に
代々相伝の霊宝数品伝来せり抑開基親性坊の俗姓ハ藤原
氏俵藤太秀郷の後胤武蔵刺史波多野出雲守義重の嫡男
なり又義重ハ禅法を修行して大佛浣如是と号く其子親性
も又禅法を修して出家し座禅工夫を業とし親性或時疑心を
払ひ本来の弥陀を悟らんとて心を凝らして座禅しけるに頻に

眠きさして堪ざりけり義にもあらねば現のごとくして達磨大師忽
然と現れて曰く汝心を凝して座禅をなせども佛心を悟らざる故
なれば却て妄念起りきたる也速に無明の眼を覚さんと思はゞ親鸞
聖人に随従して易行の大道に入べしと告給ふと見て夢覚
より親鸞奇異の思ひをなし親鸞聖人の化導を慕ふことふかさい
はひすなはち聖人今號の越州に在しけるを去て直に彼地に至て
聖人に謁し参らせ弥陀超世の悲願を聞直入の至極を飽ませ
御教化に預り真の御弟子となりけり本覚寺と號せしとなん
始め當國吉田郡和田といふ所に建立ありしが後に今の地に移住せしとぞ
一説に曰當寺は覚如上人の御門弟三州和田の信性坊の建立に
となり信性坊は三州和田圓善坊の息なり
○什宝には高祖御自畫の御影○聖徳皇御自作像○阿弥陀

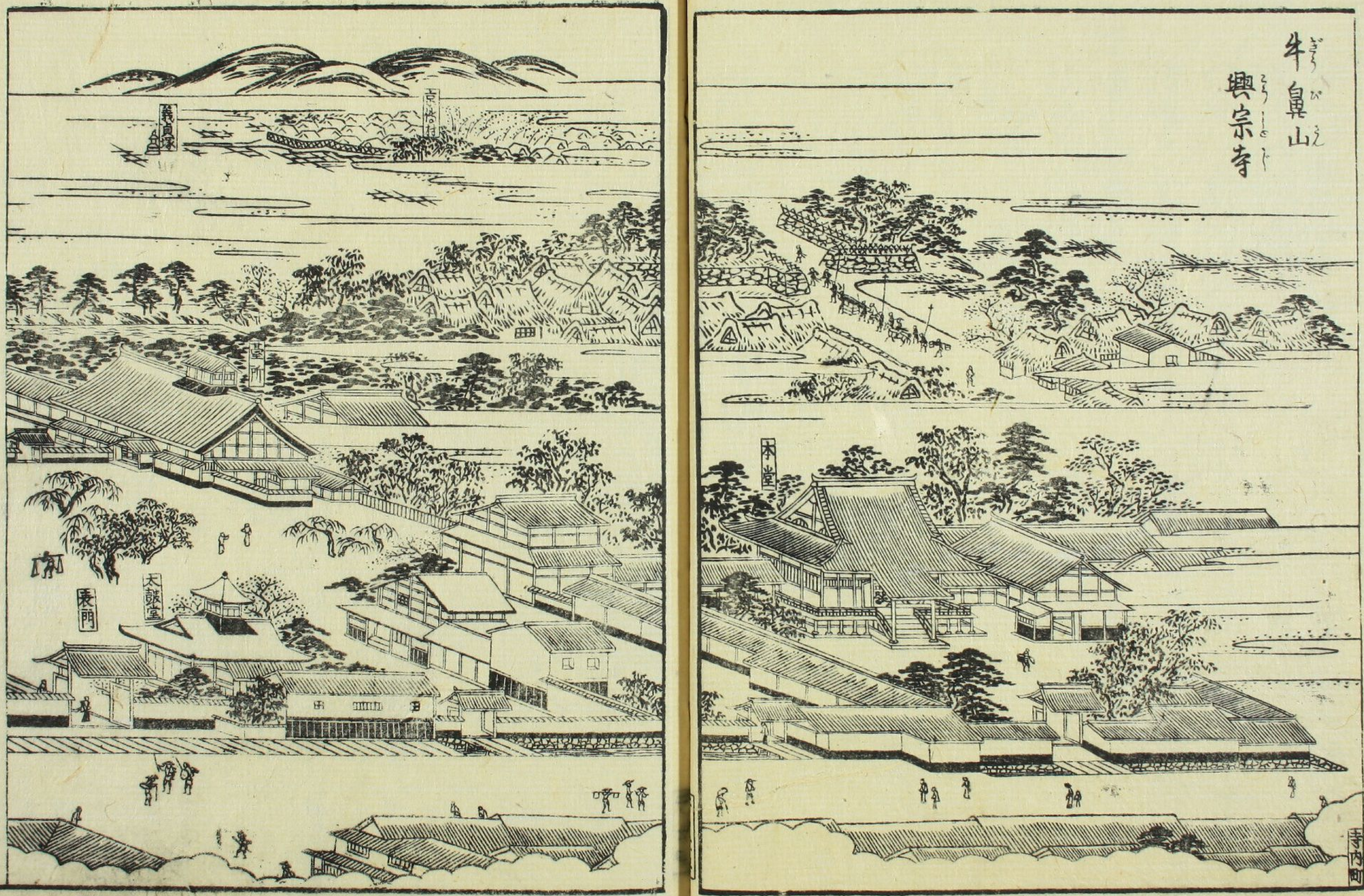
親鸞上人像○十字名号 聖人御筆 ○法然上人御影 蓮師御筆 ○蓮如上人
御影 御自作 ○九條御袈裟 聖人御譲 ○六高僧 寂如上人御表書 ○六字名号 實如
上人御筆○渡唐天神畫像 御同筆 ○古済の御書 御同筆 ○蓮如上人御遺
言御書○三界唯一心の掛地 寂如上人御筆 ○古その傳繪 全図の筆 ○高祖の
真影 蓮如上人御筆

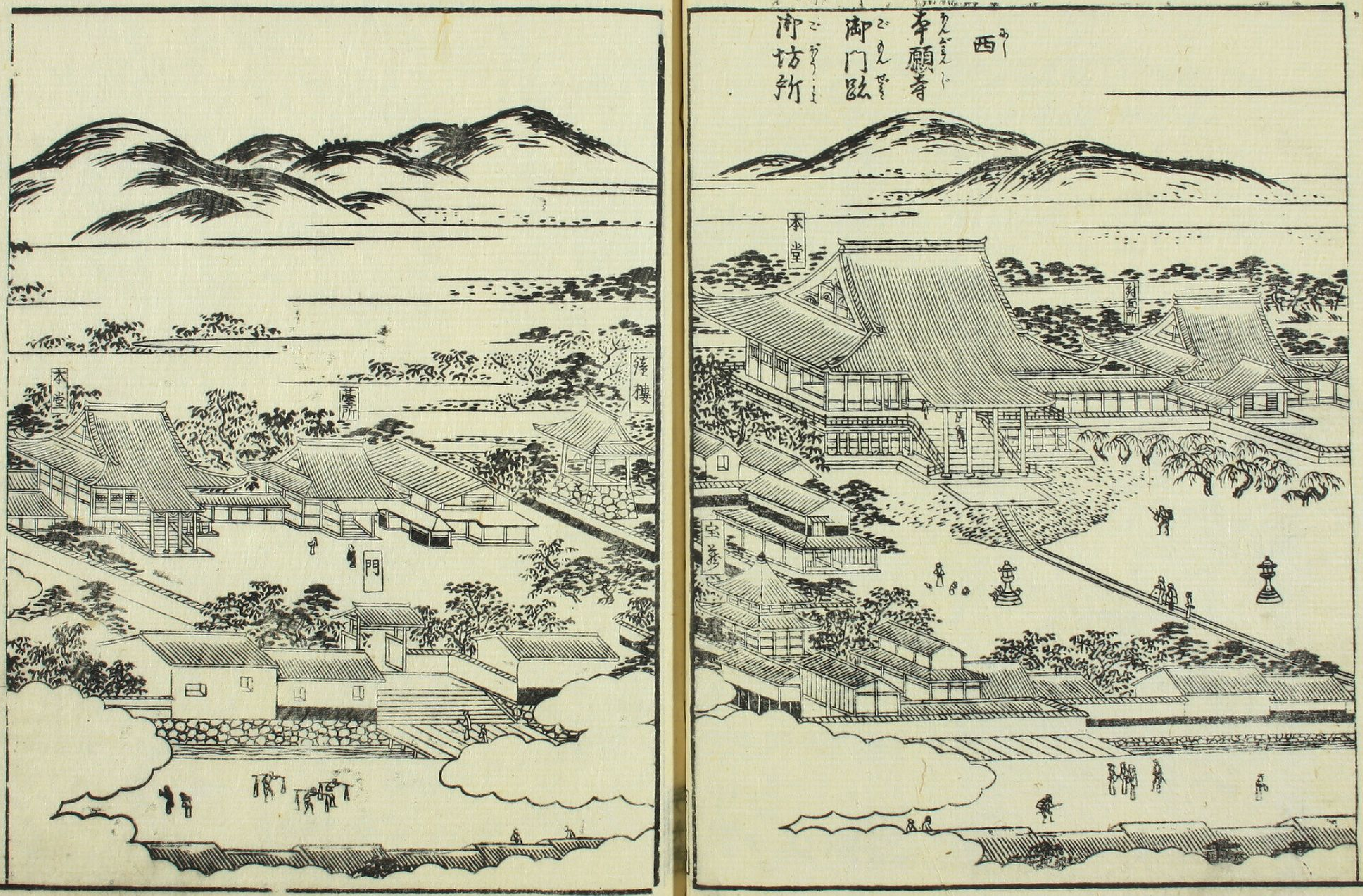
西本願寺御門跡御坊　同所

本堂十九間四面

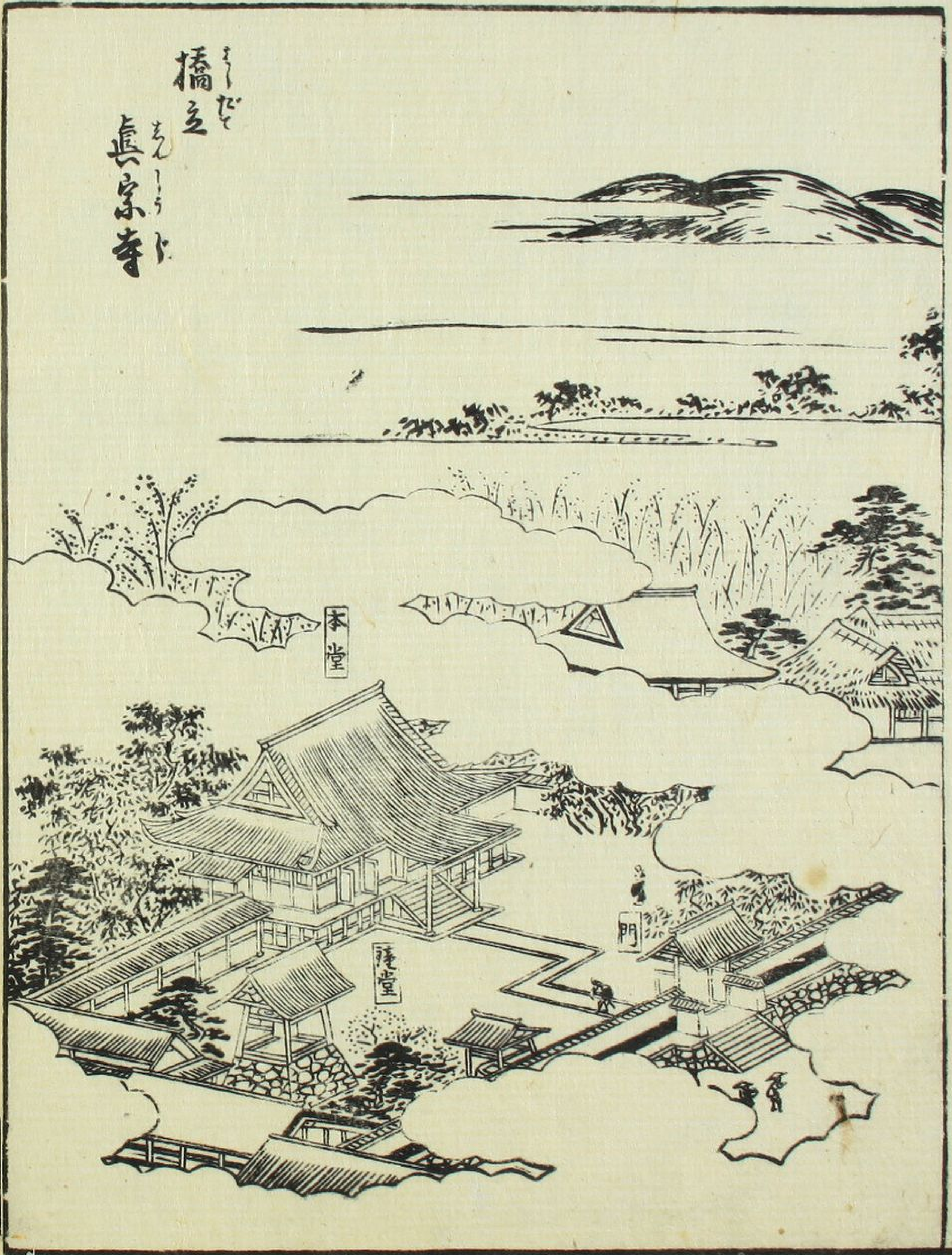
牛鼻山興宗寺　西派 澄家　同所

本堂九間四面本尊如来は弘法大師の御作といへり覚如上人の
門弟田嶋行如法師の造立なる寺也慕帰繪詞に覚如上人面
受の門弟の列に行如とあり傍に田嶋興宗寺と記せりまさ
行如は祖師の直弟ともいひ御弟行如法師の事を詳に紀せり

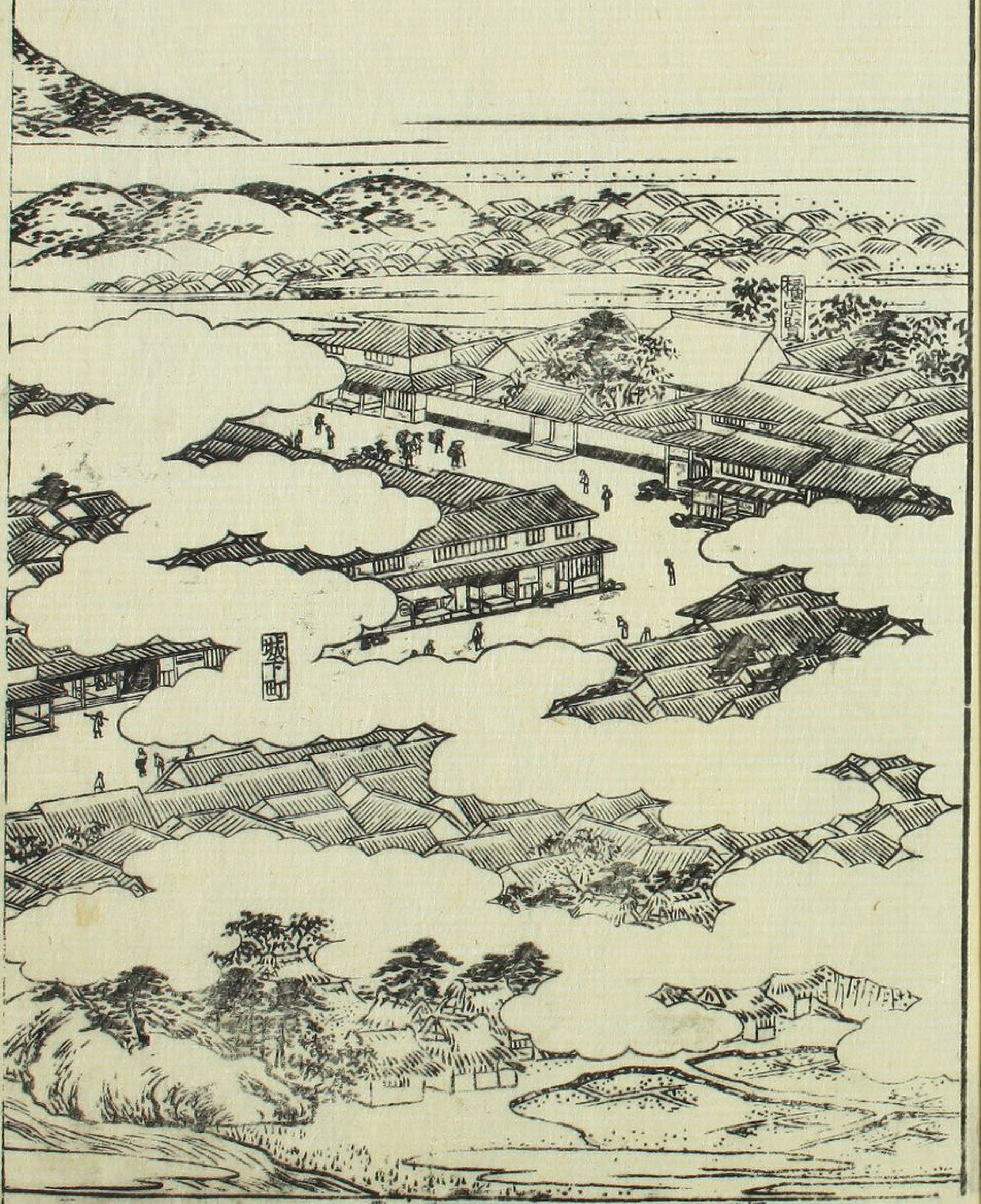

牛鼻山
興宗寺
本堂
寺内町
太鼓堂
表門
義貞塚



西本願寺御門跡御坊所
本堂
對面所
宝蔵
本堂
臺所
門



宗祖聖人御年八十歳に及ばせ給ふ砌に但馬國より京都在
番乃武士あり小県時政の玄孫小県弥治郎宗之と号し
在番の間聖人御教化を蒙り給ひ御弟子となり法名を給
園と改む年いまだ三十六歳にして若年なりといへども且心至二
の信者なり聖人滅後猶本國に下向して弘法の基跡を開く
長命にして九十余歳を保ち給ふ本願寺第三代覚如上人當國
にあり在國の中面謁しまりければ上人甚感悦ありせ給ひ給
園の法名祖師の直説を守るがごとし尋て如の一字をあたへて給
如と名づけさせ給ふところ故に但馬の真宗寺と称し○親鸞
聖人蓮如上人蓮座二尊像を安置せり即蓮如上人の真筆
なり○名号御如法師の本像あり其外霊宝由緒之
○九十九橋は福井の町中にあり此橋中半までは石にて作り正中より
向へは木の橋なり実に珍らしき橋のさま也此川は則として法その濫觴



福井九十九橋

石橋の堅固なりしも水勢に打ゆるゝ時は悉く流れ落る事甚し
と云て然されば法師の材木の橋の先なりしが其ちて水の勢ひ寛む
が為に半は石の橋は崩れ落て今は水を落てのち修造せりとも
容易からん事とぞ

○足羽明神の社も足羽郡にあり当社は人皇二十七代継体天皇
を祝ひ祭り奉れ

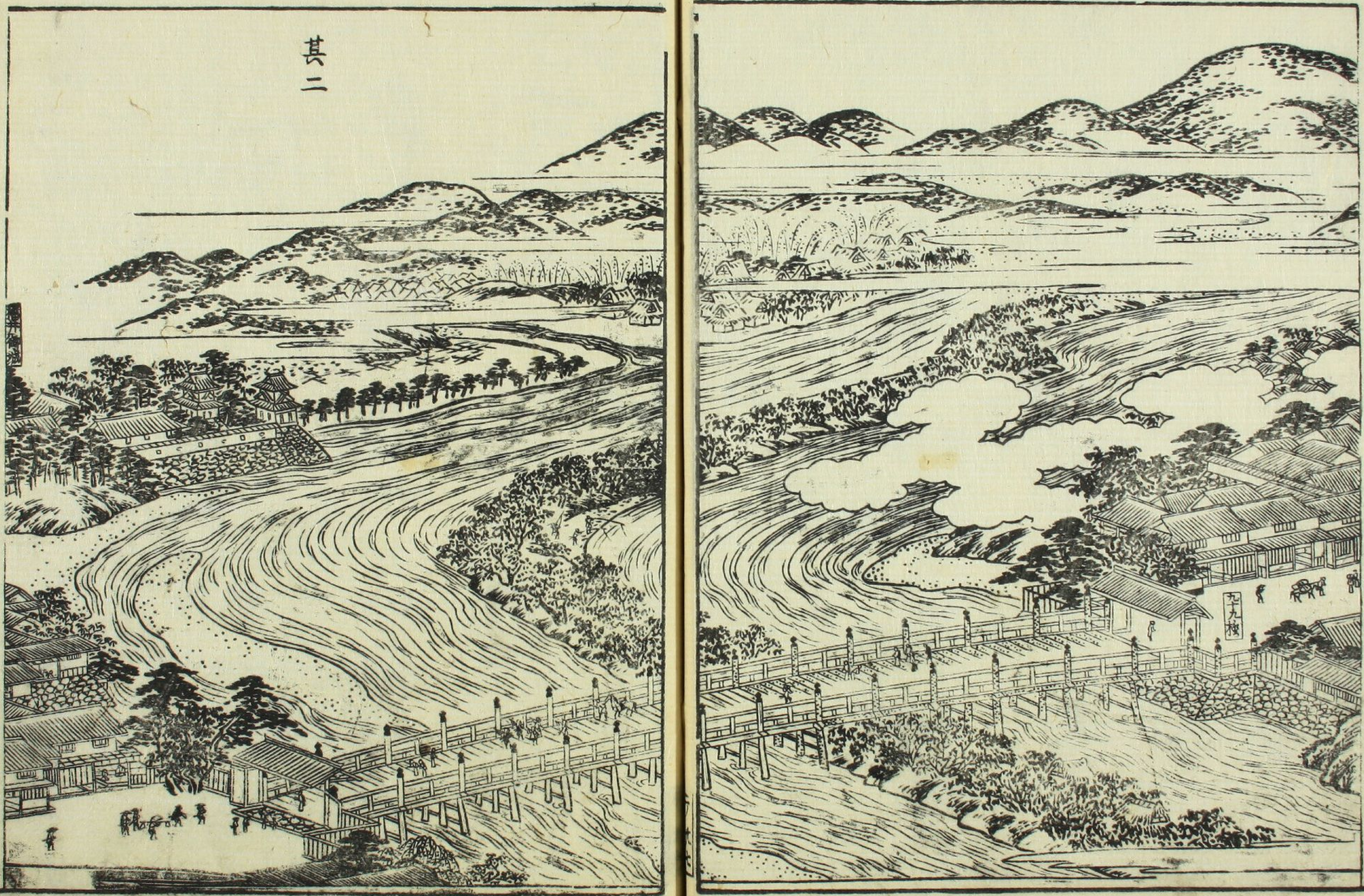
○福井の城下より一里東に大なる川あり急流矢を射るが如く橋を
架べき様なければ舩をつなぎ浮く渡橋とせり故に川の名は九頭
龍川といへども里人は舩橋川と唱へ地名とも川の名とも舩橋といふ
此つなげる舩を凡て四十八艘なりとぞ

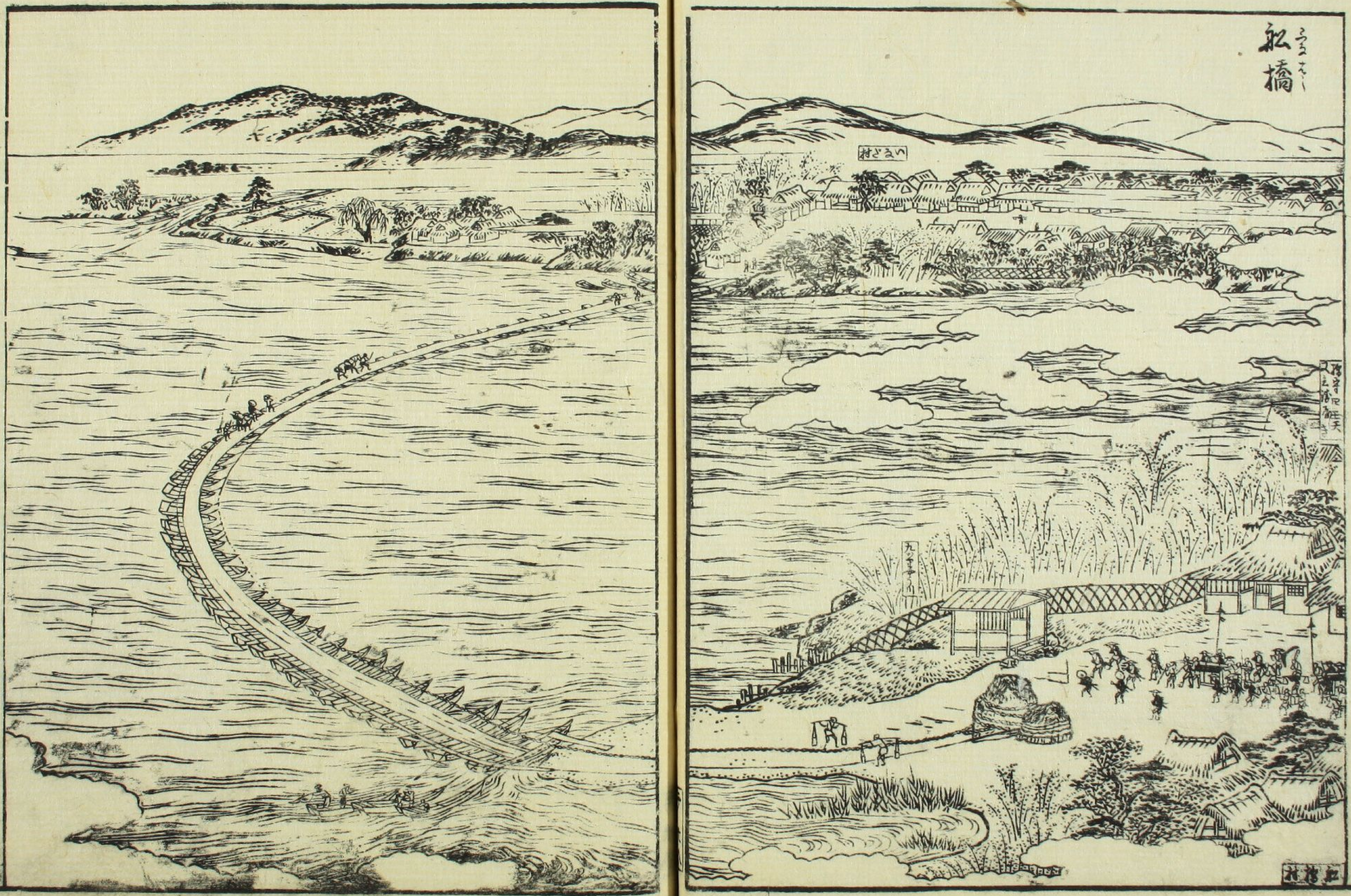
柘柱御舊跡

舩橋より半里畑中にあり

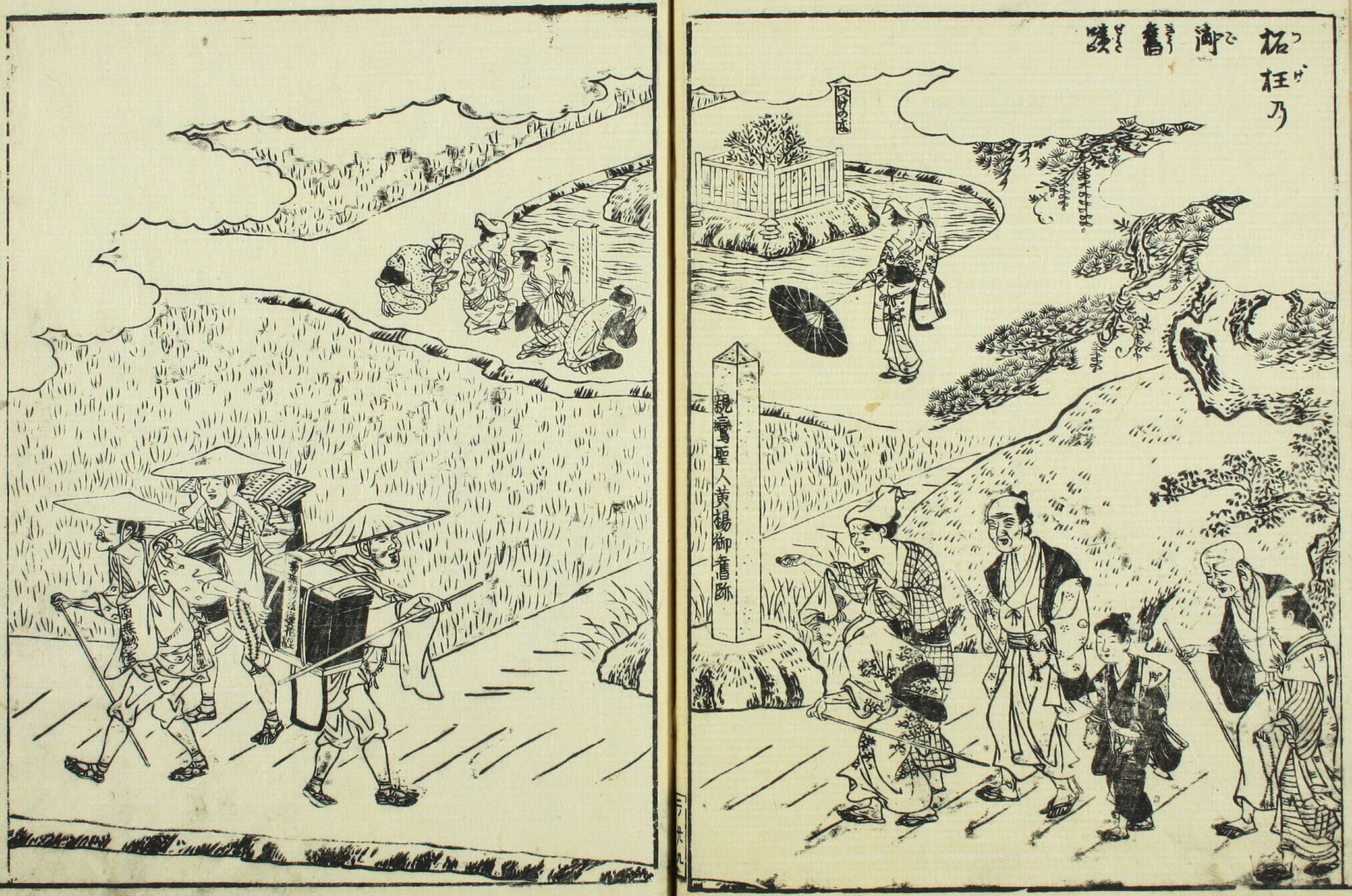
宗祖親鸞聖人承元元年三月下旬越後へ遷され給ふ時此
里に後家長者といふ者あり聖人此家に一夜寄宿し給ひける
に御菓子に柘柱の楊枝を添へて出しけるに聖人手づから庭前
にさし給ひ我法末世に壮んならば此柘柱根芽を生ぜよとの

其二





ふなはし
舩橋
いざる村


栂杜乃御舊蹟
つげのき
親鸞聖人黄楊御舊跡

給ひけるに忽ち一夜のうちに根を生じ葉繁く生ひ栄へけり
といひ伝へたり

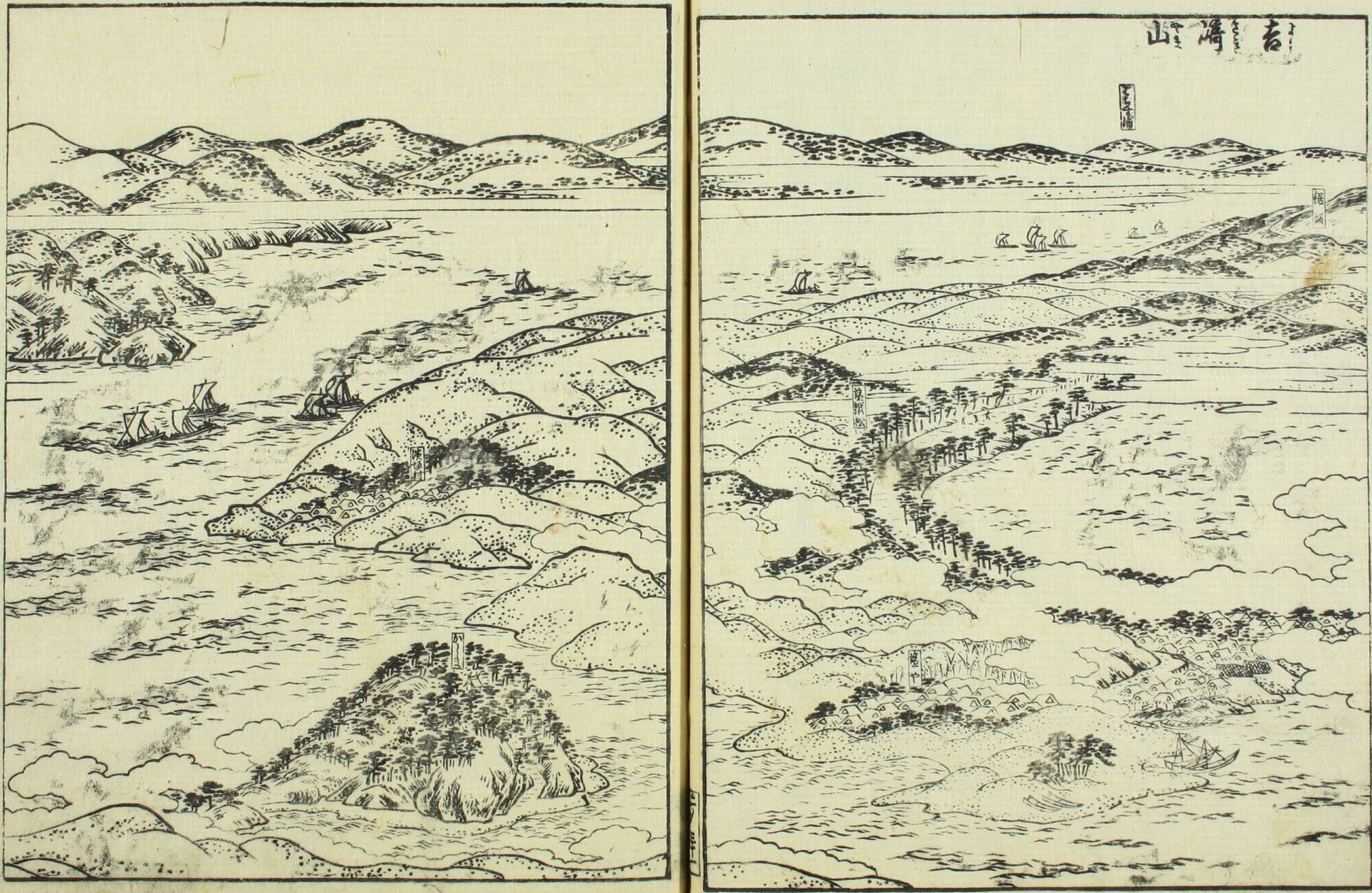
細呂木鋸坂 坂井より細呂木まで十里此所に蓮如上人の御舊跡川尻西光寺あり東御門跡の流家なり

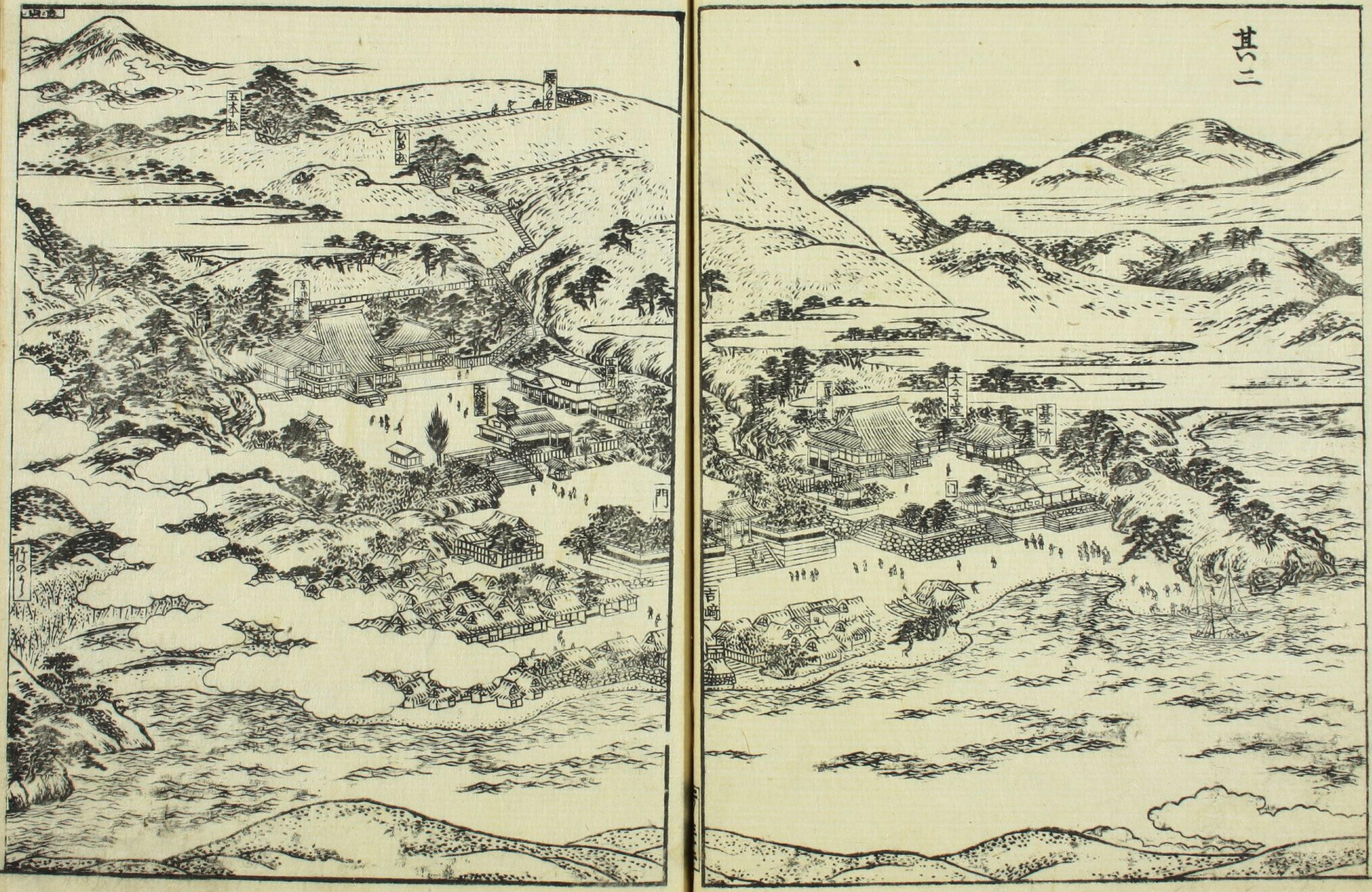
此所越前加賀の境なり祖師左遷ならせ給ふ時越前の御門
徒弟此坂まで見送り奉り既に別れ奉りぬるに聖人権者の
御身なれども人々に別れをおしませ給ふさまに御詞
かくやおもふらん
帰り安く鋸坂に引きかへ身の行方はもと細呂木
とよん詠じ給ひける舊跡なり

吉崎山

此山は本願寺御相承八代信證院殿蓮如上人文明三年
四月上旬当国に下向在して御教化ならせ給ふ時国守朝倉弾

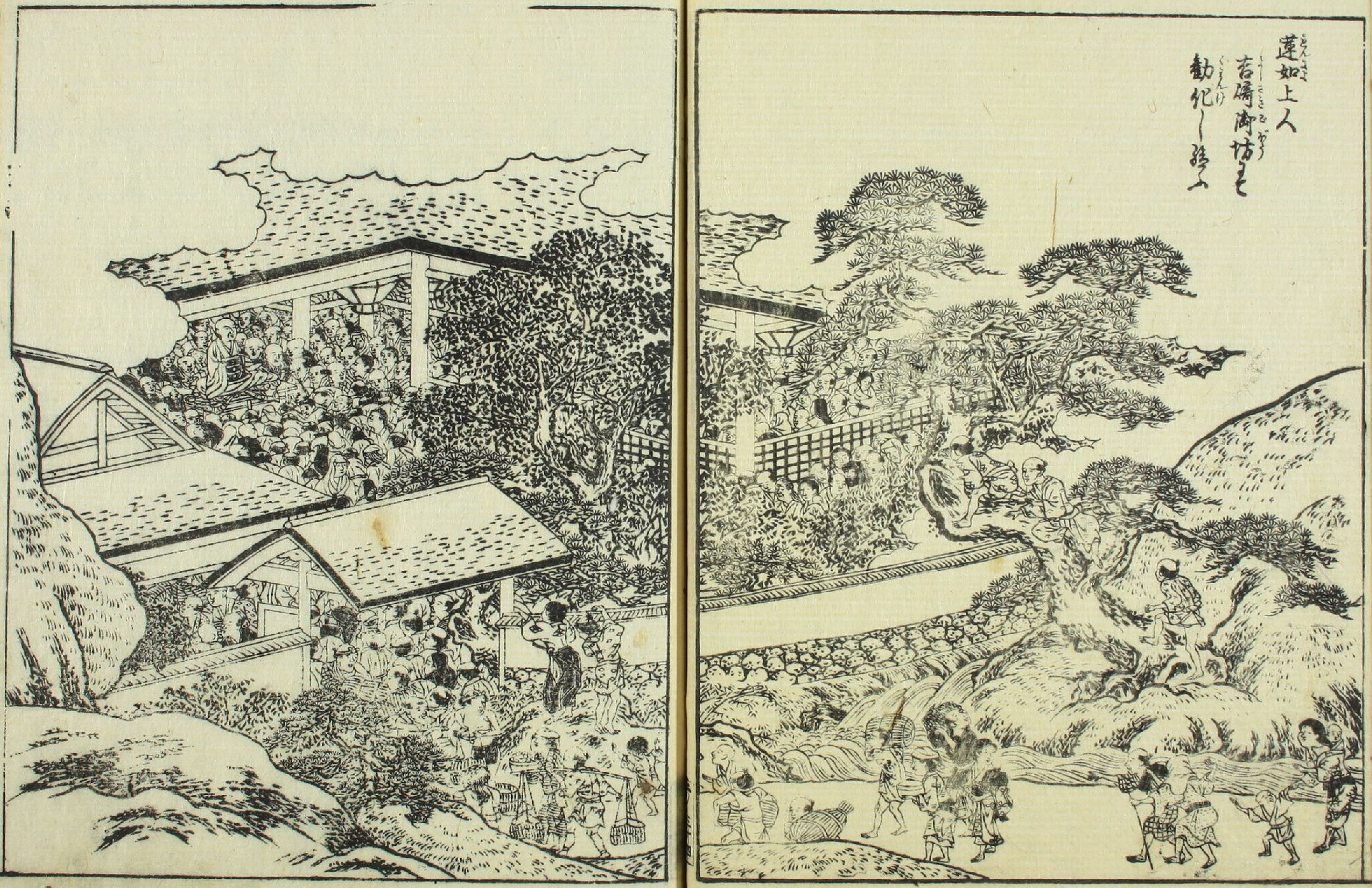
正左衛門尉貞景帰依ある故に行くて大施主となり即蓮師の
開闢し給ひける御山なり則山の頂上に古の御堂跡ありて蓮
師自ら植給ふ松并に腰掛石あり
吉崎は街道の驛路にはあらで北の方の海辺なり細呂木より山
路を左へ行越前加賀の境まで加賀の塩屋越前三国の海端へさし出で其
る堀切ありて屈曲なる入海吉崎の麓をめぐり海上には越の小浜浜坊
鹿島の社もみへて風景絶えて筆も詞も及ぶべからず北蓮如上人此土地の法
喜みえ給ふし給ひ一宇の御堂を造立し朝暮に化導ましくまして
当国はいふに及ばず加賀能登越中越後其外海山遠近を隔て遠
近の国々より蓮師の教化にあづかりまつらんと老幼男女貴き賤しき
きもおし群て此吉崎に来詣し小国の方ひまて白雪いと深く積つて
て谷は埋み路は塞ぎ家ゐ凡と剥ぎてきを又に厭ふべからず吉崎
の群集数しく堂内は更之寺中にも居余り庭雪に座し風雨に打
立化道の為ときは我身を忘れ昼夜の累もなく群集しけるがされば
より小国七州の内には今も伝へね楽栄之此比は室町義政公御治世に流


吉崎山


其二
五本松
太子堂
門
吉崎

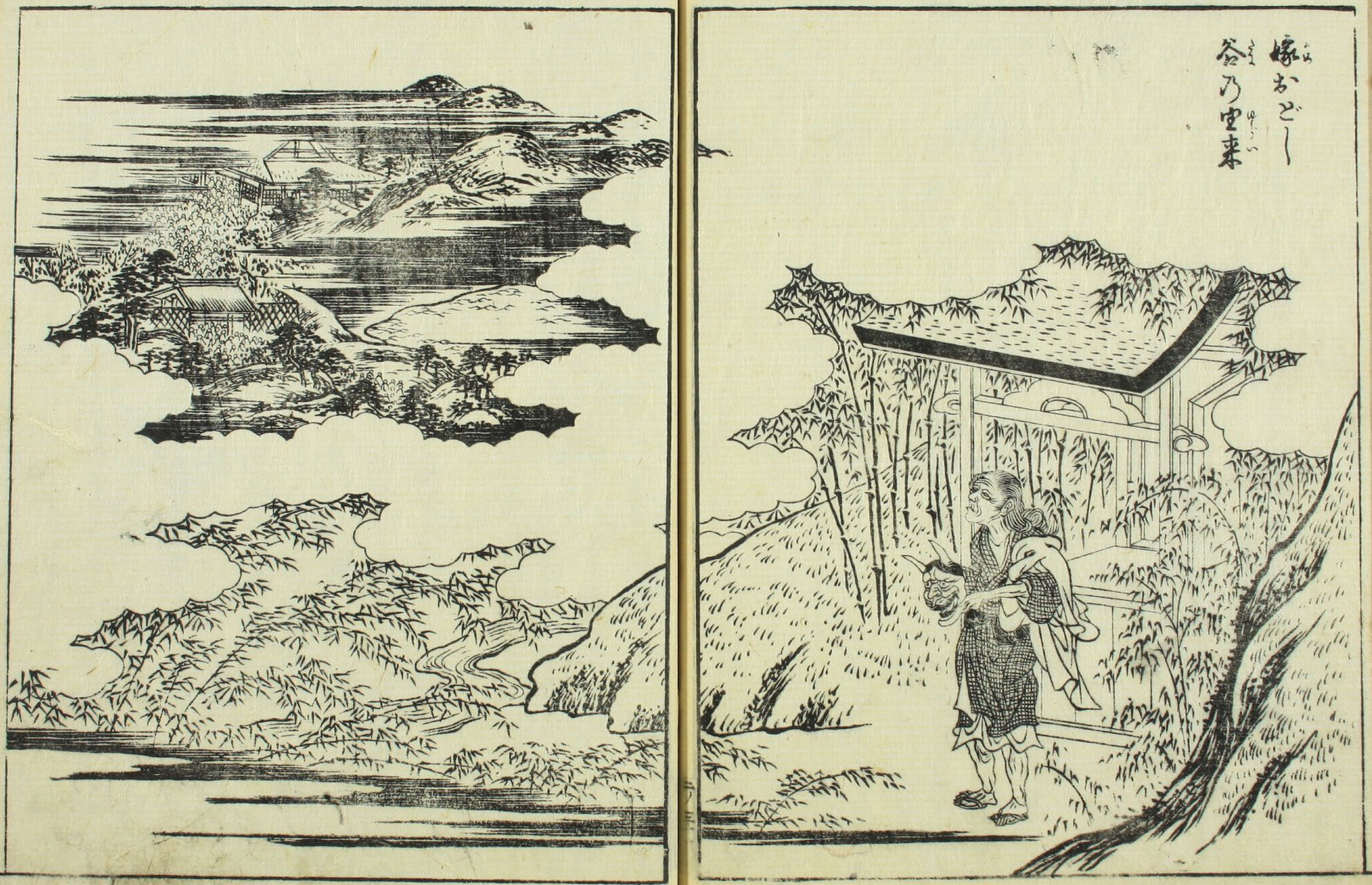
遂に頽る政事に荒ミ給へバ上下乃士民悉く恨ミ老臣等も各勢ひを
争ひまくは迂しくる程に山名細川等終に天下の騒乱を起しぬこれを應
仁の乱と云へりかゝる物騒しき世の中なれバ佛をも尊む者なく法を
も信ぜざる輩多かるに蓮師の廣徳著くして愚昧の尼婆庶情の婦
女にいたるまで弥陀誓願の有難きを信じ参らせ一心専修念佛の行
者となり即得往生の果を得るは偏に上人乃妙なる御教化によるな
れ是故に祖師聖人の再来中興開山と崇め奉るも宜なるかな實に末
の國に二の勝たる事にて摂津の人なる貧しき百姓なりし妻とともに日ごろ
月比吉崎御坊へ歩を運び蓮如上人の御教化を歓びけるに一人の老母あ
慳貪邪見の性質にて兎角摂津夫婦が称名を喜び蓮師に随身し奉
るを腹あしく思ひ罵りて夫婦の者を責て曰ひけり汝等何ゆゑかくは愚なる
ことやさらぬだに貧しき身乃畑の立や立ざるに心をかけずして
朝夕は後世を願ふとて家を出て夕には法義を歓ぶとて間を費し一人の
母には飢死やさせつらん売僧坊主の偽言にたらされんより耕耘に
力を盡し此世の貧苦を遁るゝ道に心を入れて聴りなんと摂津さ

まくしたてゝ罵れども帰依し参らする蓮如上人御勧化の御掟と
申されたることも猶しきも其うへ家業大切に精力を盡し叶ふ
まじくも家を富して孫々相続して永く法義を喜ぶと信者とは
申されとらや他力信心の此身を後に相崩しまつらんは誠の念佛の行
者にはあらじとつねづね教示し給ひぬされば当流の信心と申すそれ
国に起き族に非出精して家業を先へ仕舞し其ひまには法座に
連り称名をも勤めければとかく家業の障りとは成らぬ故斯く
夫婦蓮如上人の御化益に預り参らせてより怠りなく農業に力を
盡し家業を大事と務めて以前よりも身上の勝りなりしより心
を労するのみなれば身も猶のづから悦び今は他人の手本となりて
さいはひに病なく浮沈の歩行も軽しと猶今に家のみのミを門とく
多年の悪縁を絶り給はんより絶りまかせて名号に在なりとも若知
識の法座に連りる有難き勧化を聴聞し給はで佛種善因の結と聞
き障りなく極楽へ往生を遂給へよしと夫婦諸共に涙を流しかきく
どきける参らせしかど毫も耳に掛る気色なく猶も強ひて離しとや弥ゝ怒り悪


蓮如上人
吉崎御坊にて
勧化し給ふ

念募を今は謀計をもつて夫婦が信心をさまさんと密に心に巧みけり
頃は文明四年二月廿日のことなりしとかや与惣治不図して畑田より出て
家にかへりし妻は暮頃より何ものにか吉崎へ参りけり老婆是を
看て今宵こそ嫁婦一人紡ぎされば帰るさに待ちていうく脅して吉崎
参りを懲さんものをと神棚の内より我家を立出て産土神の社に納
めし鬼女の面を窃えて額に押当宇白の髪を振上ふり乱し白襟ま
引被るそのさまこそ我身ながらも恐しかれ抑心にふしぎて我此有
さまにて嫁婦の帰るべき路頭に出て蓮如坊が偽りに惑され雑行
雑修らしく神仏を踈みし嫁の心よくせんと似て白山権現の命を蒙
昔今是まで出るぞ毒蛇を設め御山参りを止よ老婆の心に従はざらん
で夫婦とも掴み殺さんと罵らば気弱きものゝいかでか是を肺さらんで
日々物とかれ住しとて今やゝと待居たる廿日の月の未のまだ昇りする
夜の刻ぞうり与惣治が妻は唯独り弥陀の御名を唱へつゝ我家を
さして帰る道に待ありけしるまでは藪の中より女ましとまろびけ
踊り出んとせしが思ふも衣の裾の荊に引かかり出し間とる手回に嫁婦

は恐しと見えけりもせず一さんに走り去り路に老婆が心胆巧しみの綾
するに妨げることそ本意なしと被荊をさんぐゝに踏え今は又の藪こそ心の
まゝに貌るゝさんとて惜しき面を放さんとするに大工夕離れざりいかにも
胸騒ぎ諸手をかけ力にまかせて引くもさらに動くべくもなく今はや耳裏
もひしくと肉につきて生きつきたる鬼女とはなりぬ浅ましと露ぞへ
もる種に気も足もなく身は枯木の生へるごとく一足も行かず能はたあき
これはきされしと立居るは途方なくぞ云へなりなる嫁婦は何からの也
も寐来りで走り晩き宿に帰りされど老婆の云へ路にざんぶ何ちん行き
路ひしやと立て看居て見えとるかどふ与惣治は立入り妻の物ごう
に跡きいうでいせんと案じけるが是は何とても我と姉と夫婦
連れて来るものを今宵は姉一人女の身の夜ふけて帰り来らん
と心元なく思ひ路ひ迎ひにとて出路ひしを是よりは急こう迄出て
迎へけりしものあるらん先是こちに待て姉人と思ぬ程して夫婦
打連急ぎけりしに彼行藪の所に立居るものありと与惣治妻は
て姉人それ何ぞいふに我こそ姉か姉なるぞとさめゝしと泣す

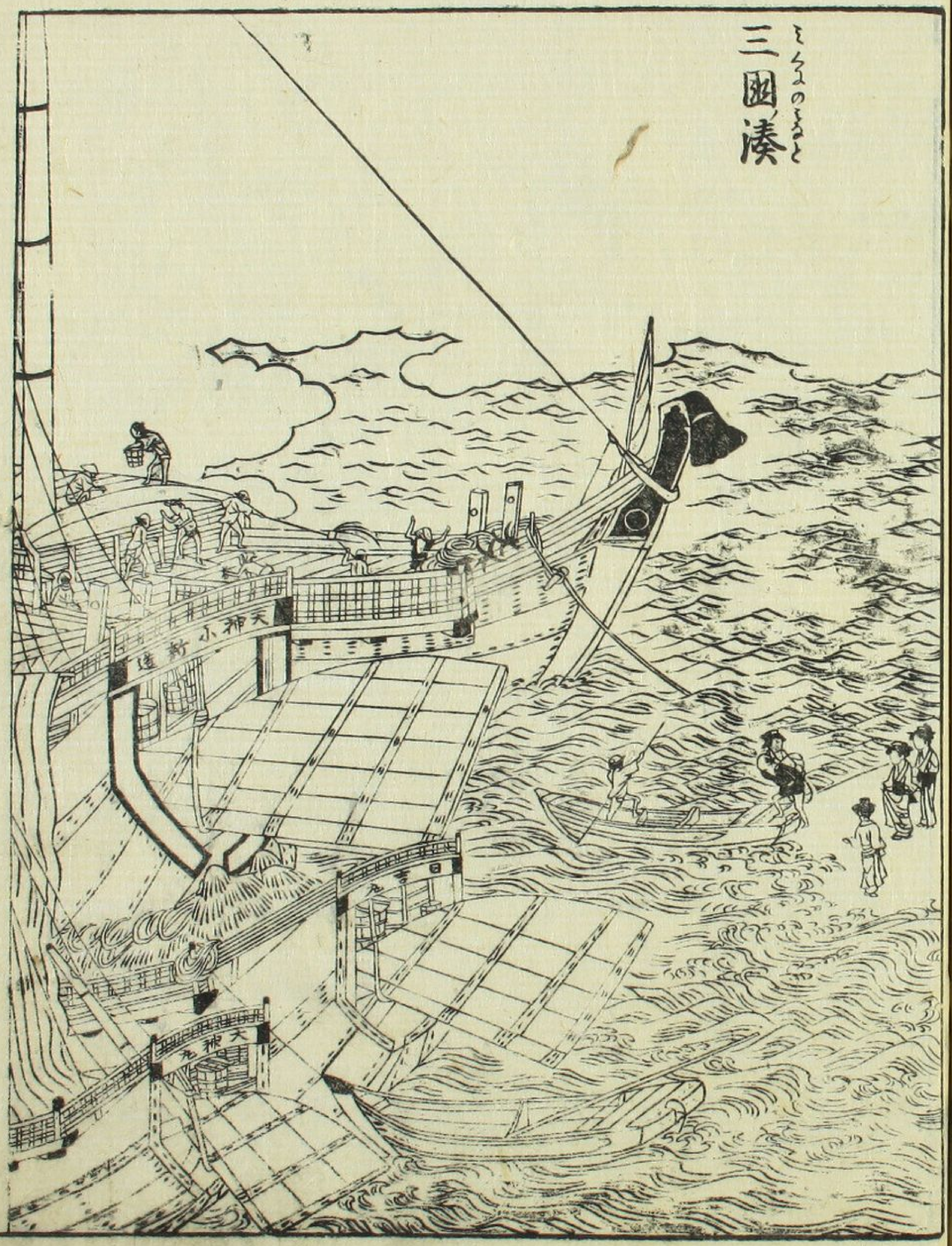


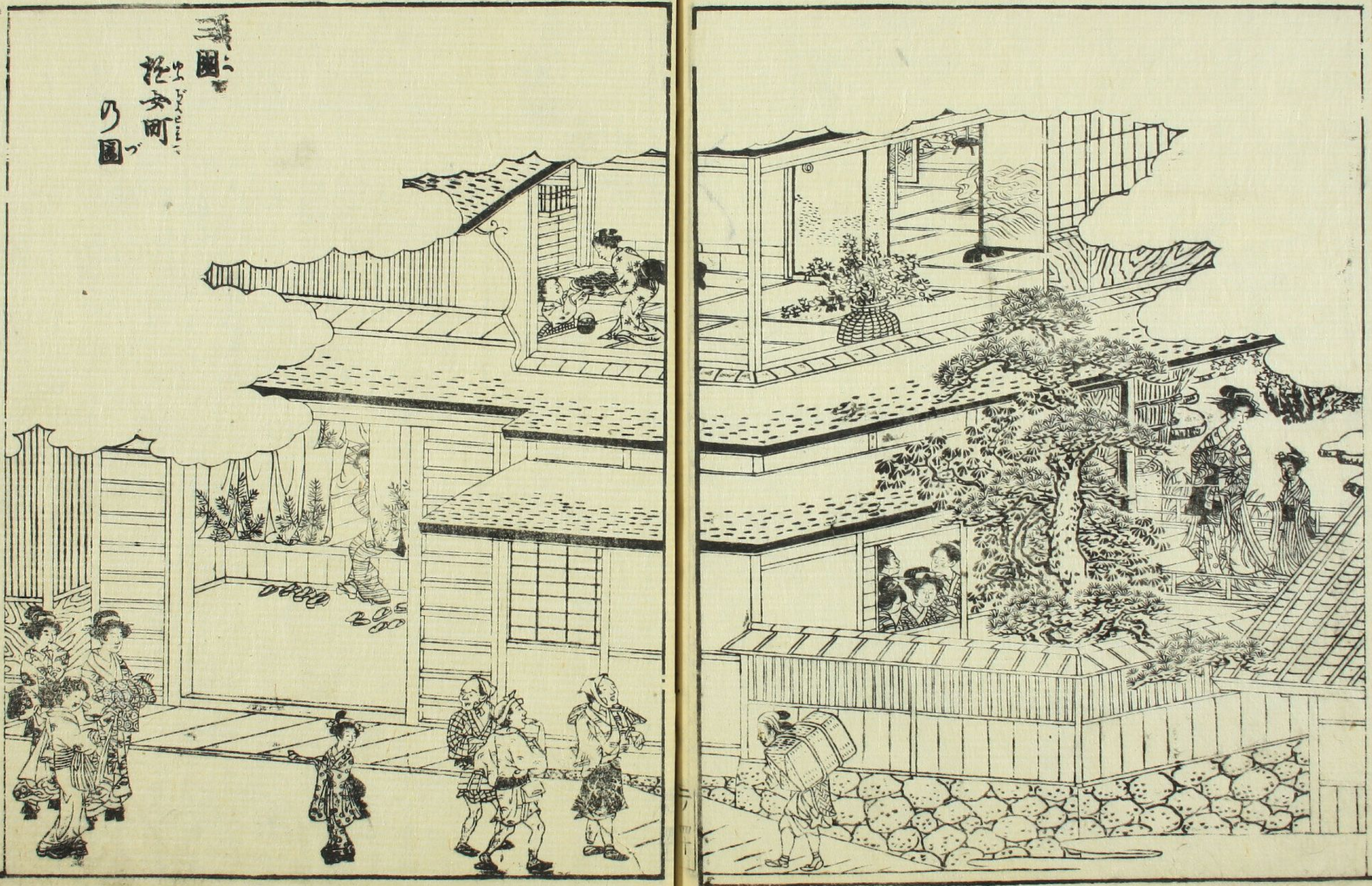
嫁おどし
谷乃由来

なり給ひしよりよくよくみれば恐しく変れる老母なれども頭に角生ひ出
色目は見出し押へ給ひの髪肩にかゝりまなこの光もなみならぬ鬼女なり
されども浅まし何とし かゝる有様を撲りて此義勢に只狼狽へまどひた
まへをみることにして弱りけれが老母も涙とゞめかねて恥かしきけれ
ことながら是れ蓮如上人の御罰にて生ながらの鬼女となりたるぞや
我いまゝで前世の宿業ふかや佛縁薄く後夫婦が堅固の信心をぞねたみ
往生報謝の称名のいまはしくいやにして此信心を碍さんとせる浅
ましき姿に立出嫁婦のくりを押とめんと懲さんと給居より小悪
しや自業自得の理りとて後きし面のひしと生付付うも動かせとも
まだ離ざりける悪業の源さ我なれが只此事に捨置て邪見の者
の見懲しませまゆやさめと雨やさめと涙たれがら無沿夫婦のかなしさは
云ん方なく極浅ましの御身の果こそ傷ふぞや此世の人ため稀なる
鬼女となり未来を何とし給ふらんと大地に伏まろひひまて血の涙をな
がして歎きけるが無沿母に向ひて中中涙ふれもたとへ難き罪業
も懺悔には滅とるしと当時吉崎の御坊に在し蓮如上人へこそ

祖師再来の善知識なれば是より御山へ参詣し上人の勧化をも
聴聞し給ひ此世はたとへ鬼となるとも未来成佛こそ此上の
肝要なれとかきくどかれて勧めぬればさしも慳貪邪見なる悪女なれど
うれ例なき罪業の源きことを顧て忽ち一念発起して先非を悔ひ後生
を懼ともなひ両手を合せ宗祖聖人現当の蓮如上人許させ給へ南
無阿弥陀佛〳〵と高声に念佛しけるが不思議なるかな鬼女の面破羅
〳〵と地に落ちてもとの手足も動き始めて旧の老母とはなりぬ斯る
不思議を見るうへは誰か信心の発起せざらんや何かみな難有や勿体なや老
母の鬼と化したるも広大無辺大慈大悲の方便にて佛ともなる法とも爺ま
へぬ浅ましき我々を摂取して捨給はぬ如来の御誓のありがたさ此上は
佛恩報謝の念佛こそいよいよ後世のたのみなりと親子夫婦三人は
喜ぶ限りなく直に吉崎へ参りつゝ蓮如上人に過ぎし有様を
のこらず御物語り申上御教化を願ひけるに上人不斜歓びたまひ
さまざまに勧化ありけるにぞ老母のよろこびは御説のごとく我が世に
類なき嬉き顔にて上人の御勧化御法座の場をも踏ど只家さのく

ありて人の貌の艶婿を嫉しく今宗風繁昌し上人の化益に依て参り集る諸国の男女幾千万とは知ず然ども我に勝る悪女もなしさるを宗義を喜び御化益を聴聞せられ各のみにて己がかくち敬礼を入に見らるるものあらんやと妬もつ人ね悪念の起りあはれ御坊へ参詣せば人の絶よかしと思ひ煩ひしける悔き心より生るがしる鬼女とならる悪人まてさらふむかし悪業の我こうても如来の御慈悲上人の御化導にまて未来の苦患をまぬがれ後生は実義貌に生るべき御法の徳て御示し給ひけしと深くよく感て懺悔しければ上人あはれと殊勝のるに名も此世は貌醜き女汝三従の悪女なりとも一念發起し助け給へと一度如来を頼みなば是は濁れる泥の中より蓮花の花の咲出るごとく未来は極楽浄土に往生せんずるは更に疑ひのあるべからずとて御文一章を撰述し給ひ彼老婦に与へ給ひぬ則吉崎の御文の章の中に極楽へ参りて美女佛となるべきなりと仰せ給ひ魂婦と怪足ましまし御文言は今に現然より是より彼竹藪の地にありしと嫁如くし名と号け老婦が彼にし鬼女の面もそのところにありとかや


三國湊
みくにのみなと
天神小新造
天神丸



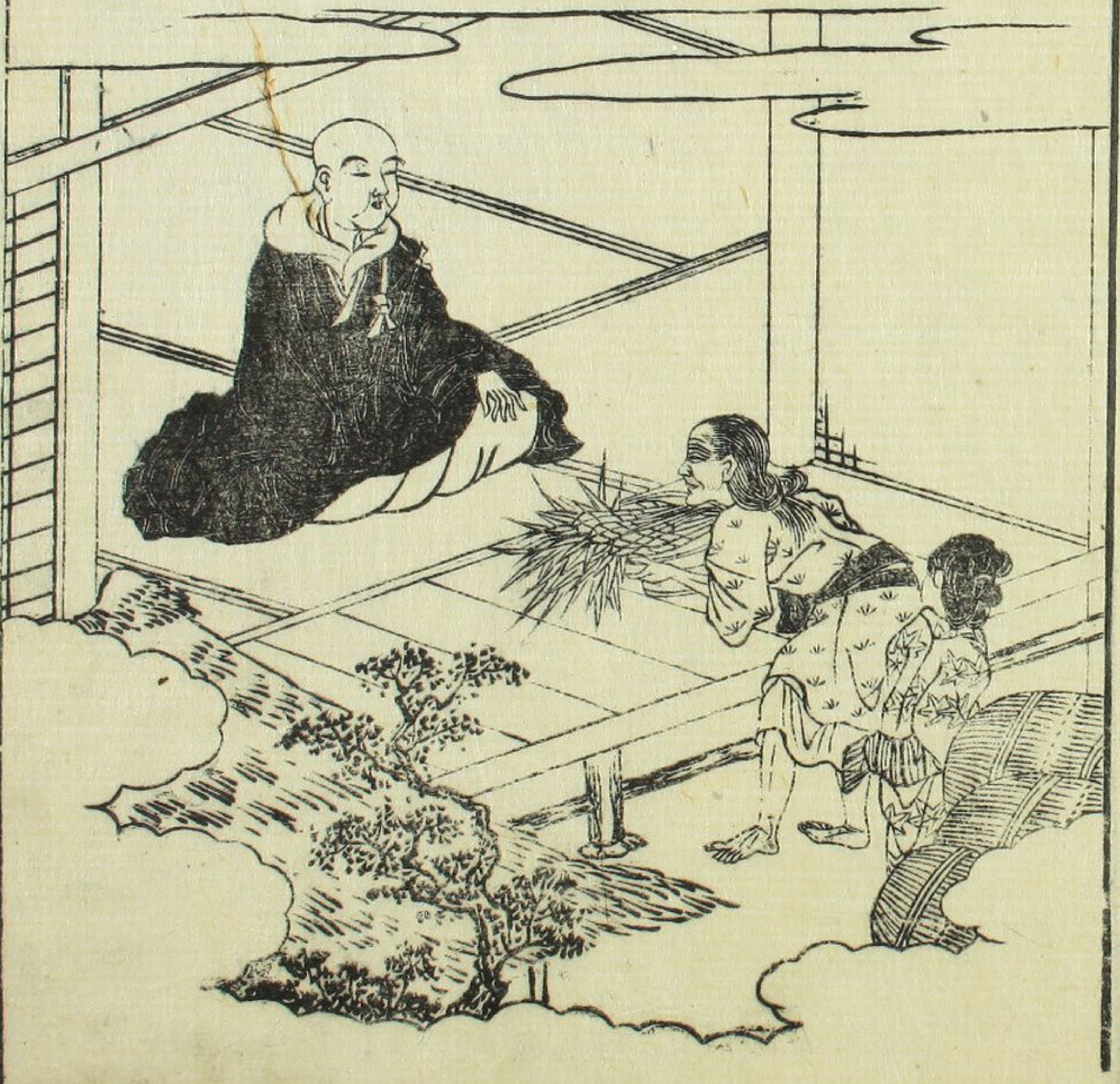
三圍
於安町の圖

〇三國は坂井郡の川口にありて商賈の家居千軒余とつゝき孫臺を並へ諸國の商船数多く入津し此海岸に艇を繋ぎ日和山には旅客の遊宴する所多く殊に小國第一の大湊なり三國の傾城町は古き名所にて今も出村と町地新町なと多くの遊君ありておらく粧ひ糸竹の調も都めきて旅人の憂を忘らしむるがゆへ此里に瀧谷寺といへるあり寺内に大きなる桜ありて弥生の頃を当國の福井加賀の大聖寺金沢なとの遊客妓女を携へ花ともに来て花と称し宴をなし実に心ちよき栄え物からありいは川の流れより加賀の客人金銀の扇あまさに或は詩歌あるひは俳諧の発句なとうつくしく書て紙条ざくゞに結ひ付已が相知れる妓婦もに訓染にき遊君も先刀より己しくありなる遊女の中より短冊に認る書て新造の女郎して是を桜に付させしかるに 凡いつらふ花にあふぎの不雅なる此数る点さまされてありけり教のこ若面ひくして迎なりなり此数るせし女郎は出村の廓にきせ川といへる遊君なりとぞ

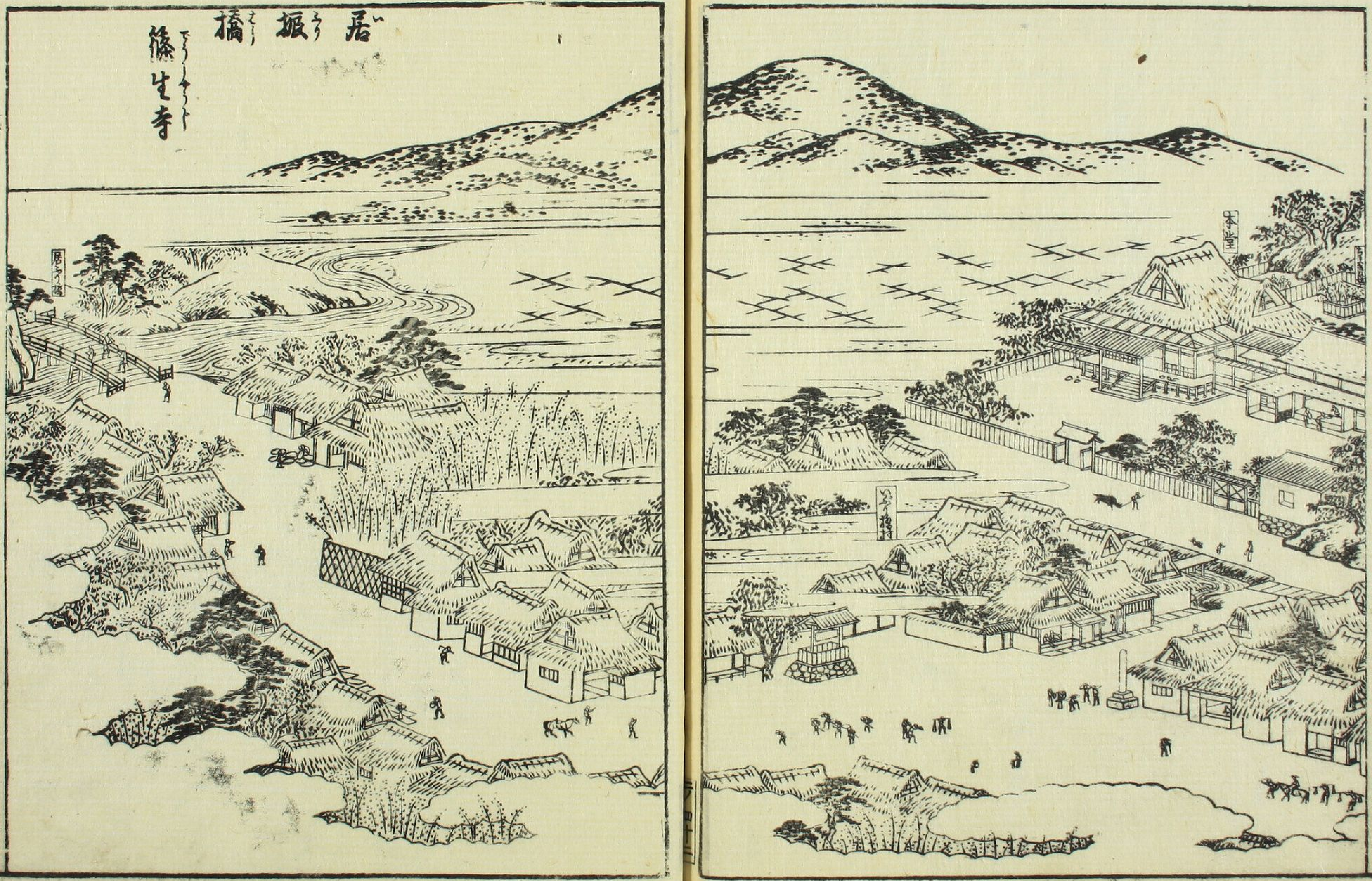
加賀國

〇越前福井より加賀の大聖寺まで行程十一里大聖寺より一里ほとし西山田村といふ所あり此村蓮如上人御息男兼誓大徳の御末孫武兵衛

蓮如上人に笹粽を奉る



居振橋
篠生寺



ところ民家あり爰より又一里ばかり居振橋といふ所に藤生寺といふ
蓮如上人の御旧跡あり蓮師爰にて鯖(?)を食し給ひて包みし藤を埋
みし給ひしに忽ち根を生じ今に其藤ありて葉先に巻ける鯖(?)の
痕ありとぞ則ち茲に藤生寺と号けるとなん
○大聖寺より三里ふして山中の湯あり爰に西照寺といふ寺あり是も
蓮如上人の御旧跡なり
○加賀国白山ハ越前越中飛騨の四ヶ国に跨れる高山也二十に余巡り
みねあまたありといへども越前国穀(?)久村九頭竜川船橋の渉より遥に
見ゆる故に白雪深く積り富士の雪の消る日ハなけれども白山の雪の
きゆる時なしとぞ山頂にある蛇が池といふあり又池あり緑水山岸を浸し
其深きことはかるべからず又一名翠(?)が池ともいへり此わたりに異草あまた
百合みづく瑶花ともいふよし名あり又禅定の菊理姫とまつりて
白山権現と崇め奉る
○越前と加賀の国界の入口を蓮の浦といふて歌名所也古歌に
跡ふりしきハ細ろふやと吉ハ崎蓮のうらハ影てうふらん
○加賀国之花の宮より小の浦と竹の浦といへり古歌に
寄小松竹のうら風吹るも走衛に移す秋乃ゆふ

斎藤別当實盛

但馬興宗寺　東派　越前福井より十一里半加賀江沼郡月津の里にあり

本尊阿弥陀如来は慈覚大師の御作也越前福井興宗寺と

同派の寺なりといへり

○月津の里より一里半西の方海辺に篠原といふ所は斎藤別当実盛が

髪を墨に染討死せし古戦場なり道の傍に実盛の塚あり後藤御の

世の中はうかりしさけき篠原や旅はしなまし蛛のいとにて

鳳凰山本覚寺　東派院家　月津より二里能美郡小松にあり

本堂九間四面高祖聖人蓮如上人建立の御影を安置せり○越

前福井本覚寺と同派の寺なり

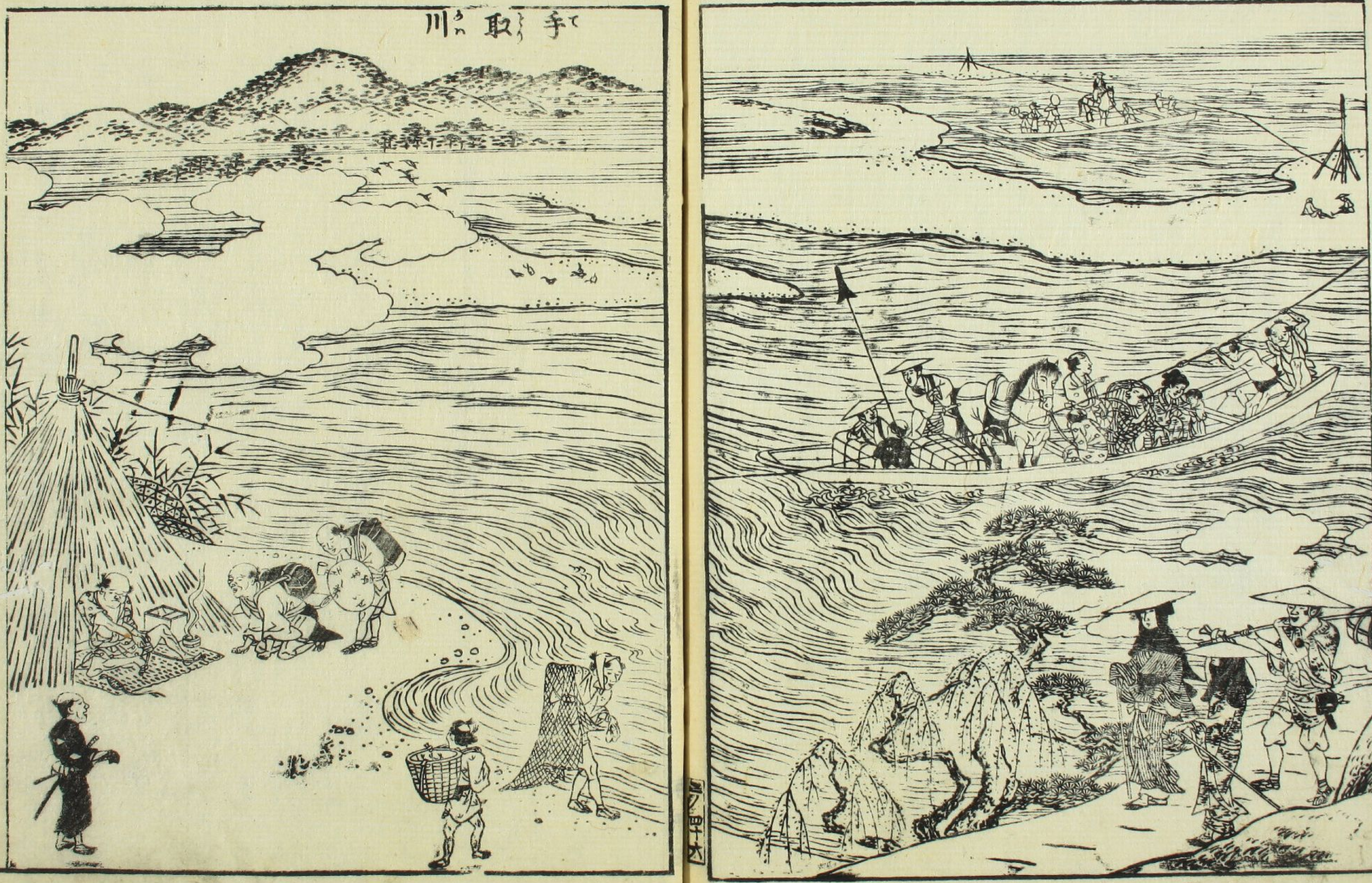
○同所に長念寺といふあり是は蓮如上人の御弟子了珍の寺跡なり

○こゝと小松の間に梯川といふ大川あり川幅凡一里ばかり水の流れはやく

旅人の船渡しにて渡るにかやり此所は川の両岸に綱を引渡し

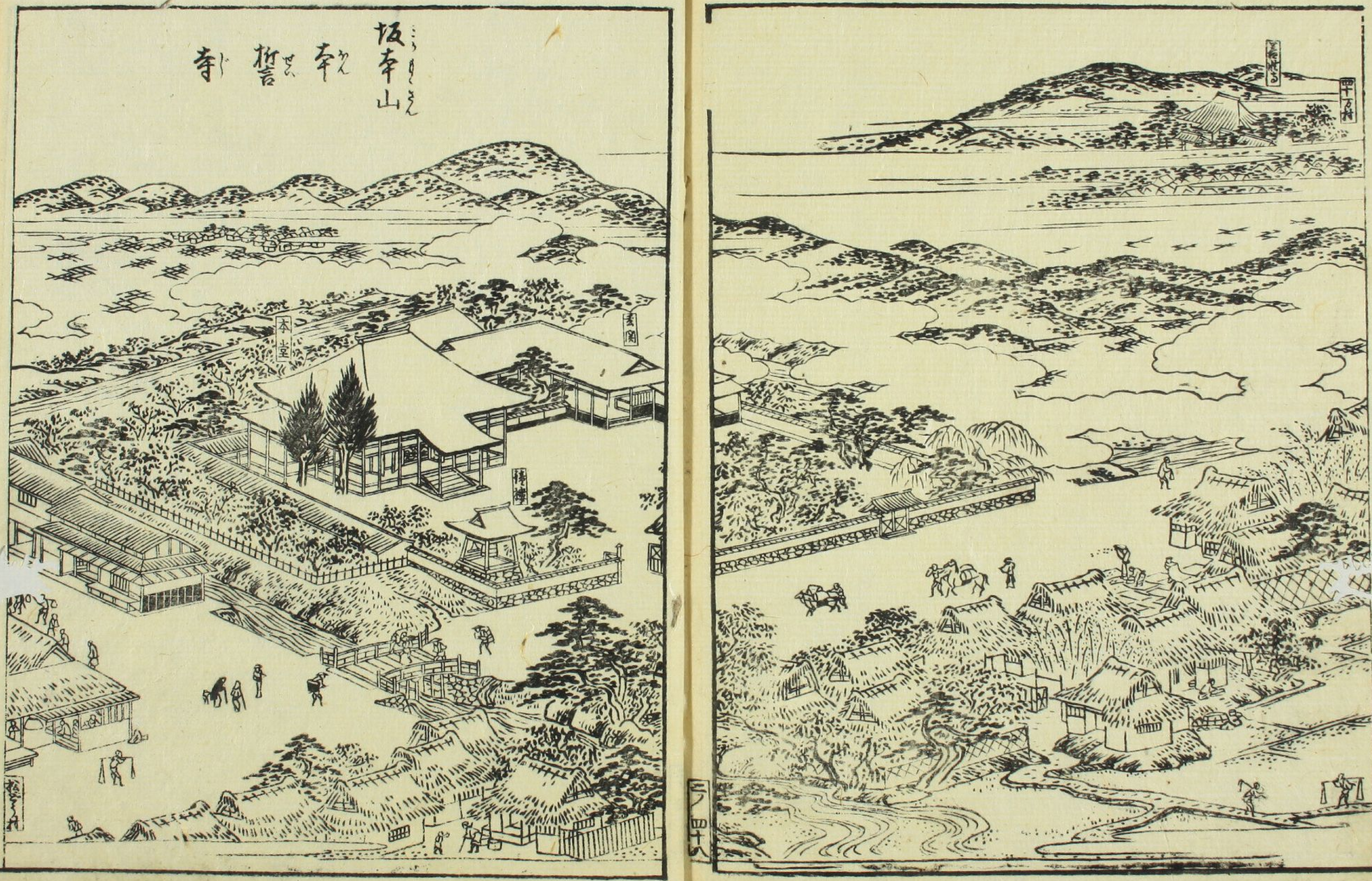
渡し守橋杭を用ひず此綱をたぐり操りてむかふの方へわたれるなり

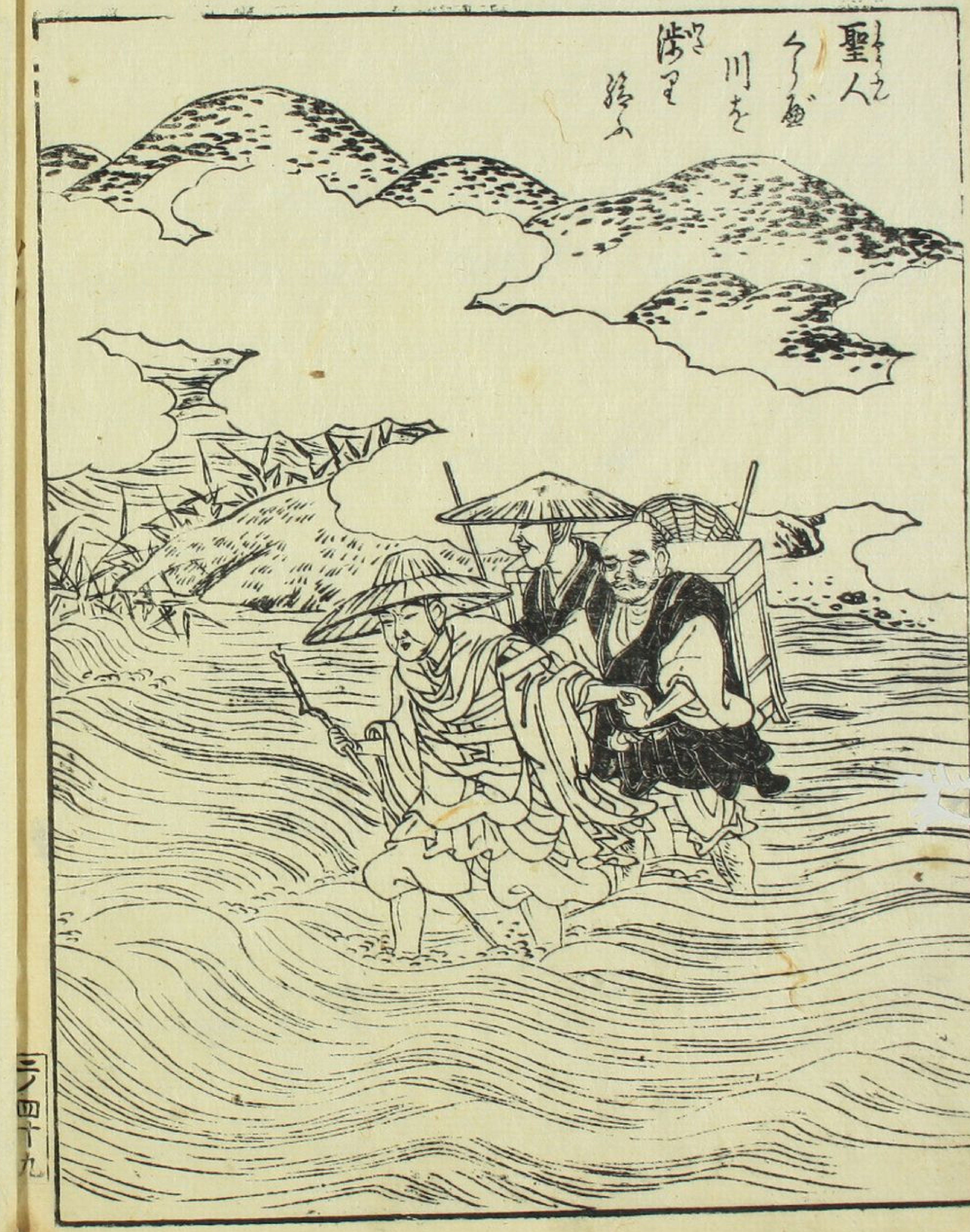
坂本山本誓寺　東派院家　小松より六里半石川郡松任にあり

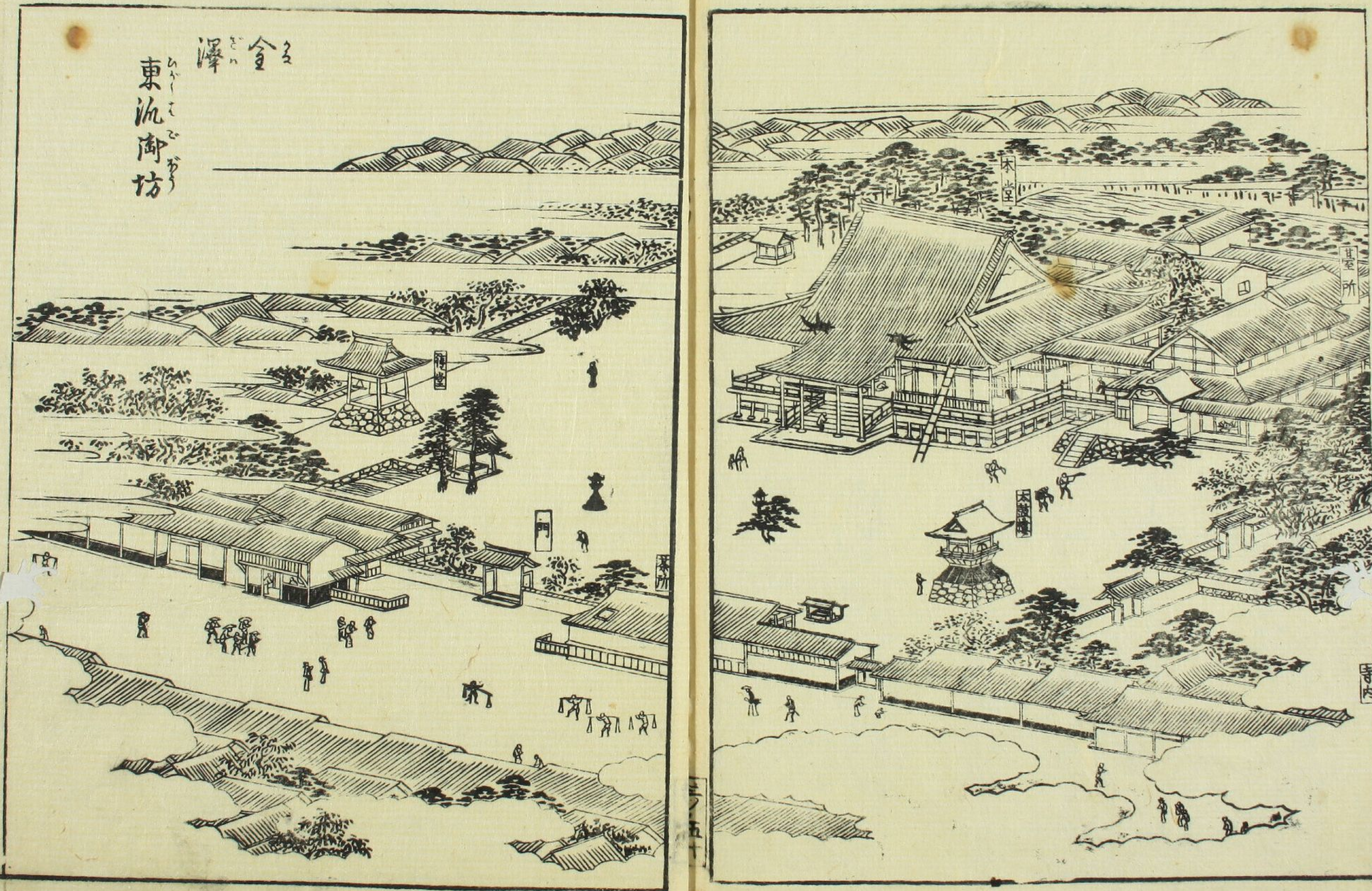

手取川

本誓寺は継古天台圓宗の精舎なりしが高祖聖人に皈依し
て本宗を改め浄土真宗の霊場となる今東本願寺御門
跡の院家にて本堂九間に面本尊は傳教大師の御作なり
抑当寺の濫觴を尋ぬるに継古天台宗の碩徳圓政上人開闢
志給ひてより以来代々天台宗の寺にてありけるが兼元元年の春
高祖聖人越後へ御下向の時寺務圓貞法師夢に金色の菩薩
寺に入せ給ふと見てこれ正夢瑞夢なるべきと思ふ折節聖人越
後へ下向し給ふよしを聞て其高徳を慕ひける處去る夜の
夢想は親鸞聖人の御事なるべしと悟り倉部川といふ所まで
出向ふ事なる小景して聖人川を渡り来らせ給ふ圓貞法師聖人
に謁し奉り我寺に請じ参らせ夢のよしを語りければ聖人其
宗旨を易給ふに圓貞法師天台宗なりけるを善く視て甚及

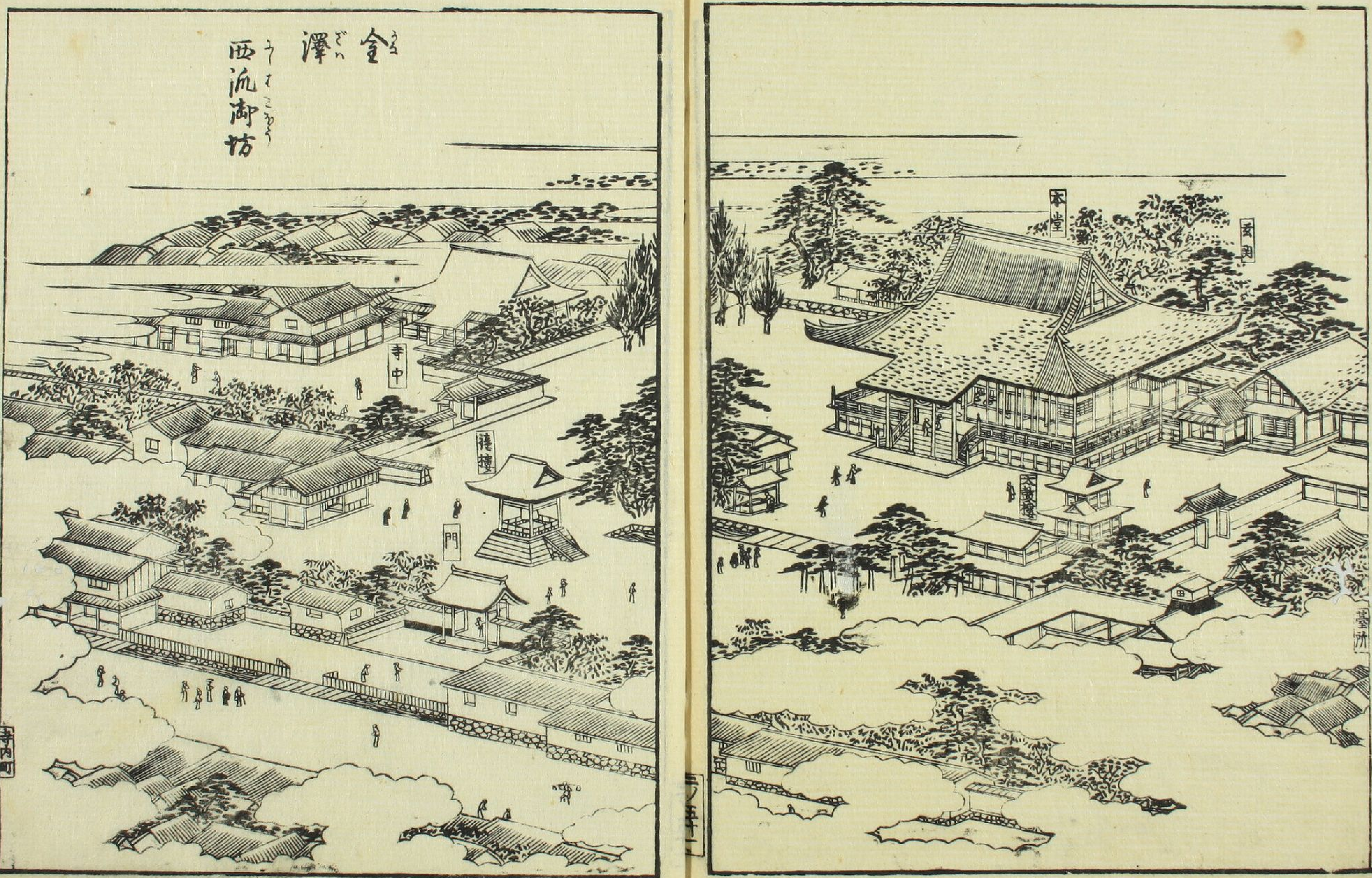
せられ此川名を尋ね給ふに遥川下へまかりさぶらへば越中へ今
日は川水浅くして聖人やすく渉り来らせ給ひけれバこれこそ
我今聖人に値奉る事を得たりこれ偏に法縁の浅からざるに
やとて感涙を落して歓びければ聖人聞し召し
法の為まかりしば遠き競川弥陀は松任近渉して
と詠じ給ひ難行易行とならべ見る時は難行は川とめがたく
苦しく易行道は渡し船に乗て近く越るが如しなお横超の直道
と号く弥陀佛は安楽世界に在して衆生を待ち給ふなり
我法に到て心を安んじ給へとのたまひ御教化ありければ直に
それば圓貞法師法悉の涙にむせび聖人を我寺に屈請し
奉り聞法随喜して本宗を廃し御弟子となり真宗に皈して
今に数百歳改めず○霊宝には聖人御真筆六字名号

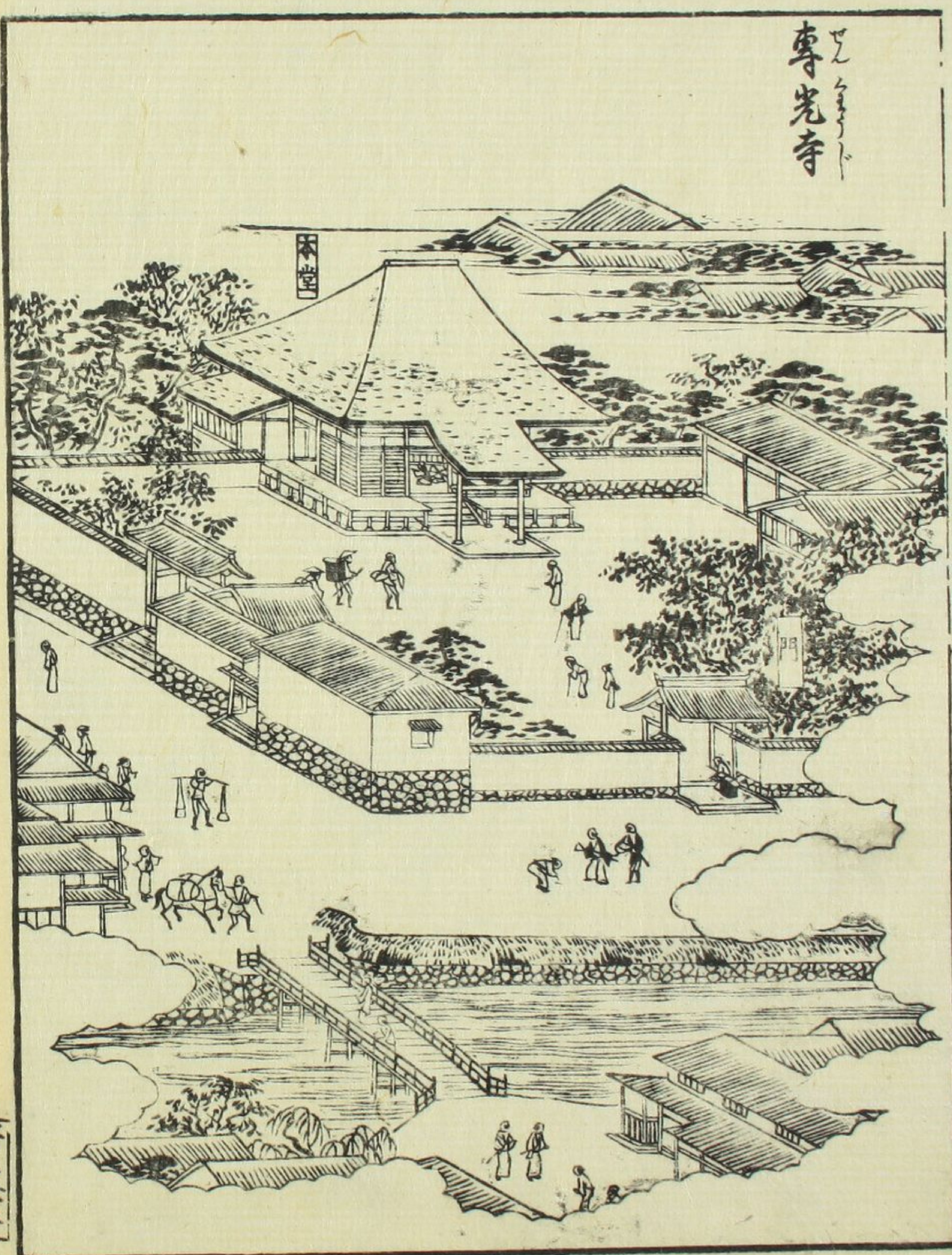

坂本山
本誓寺
本堂
玄関
鐘樓


聖人らう画川を
渉り給ふ



名
金澤
東流御坊
門
本堂
臺所
太鼓楼
寺内


金澤西流御坊
寺中
鐘樓
門
寺内町
本堂
玄関
太鼓樓
臺所



○門御真筆光明本○二歳太子乃像 聖人御作 ○御繪傳二幅 古佐光紫筆
覚如上人御裏書○太子傳五幅 全因の筆 ○いろは歌繪物 蓮如上人御筆
○独肯開基圓政上人の本像
○松任より一里半行て凡十方村の吉照寺にあり蓮如上人の御舊跡なり

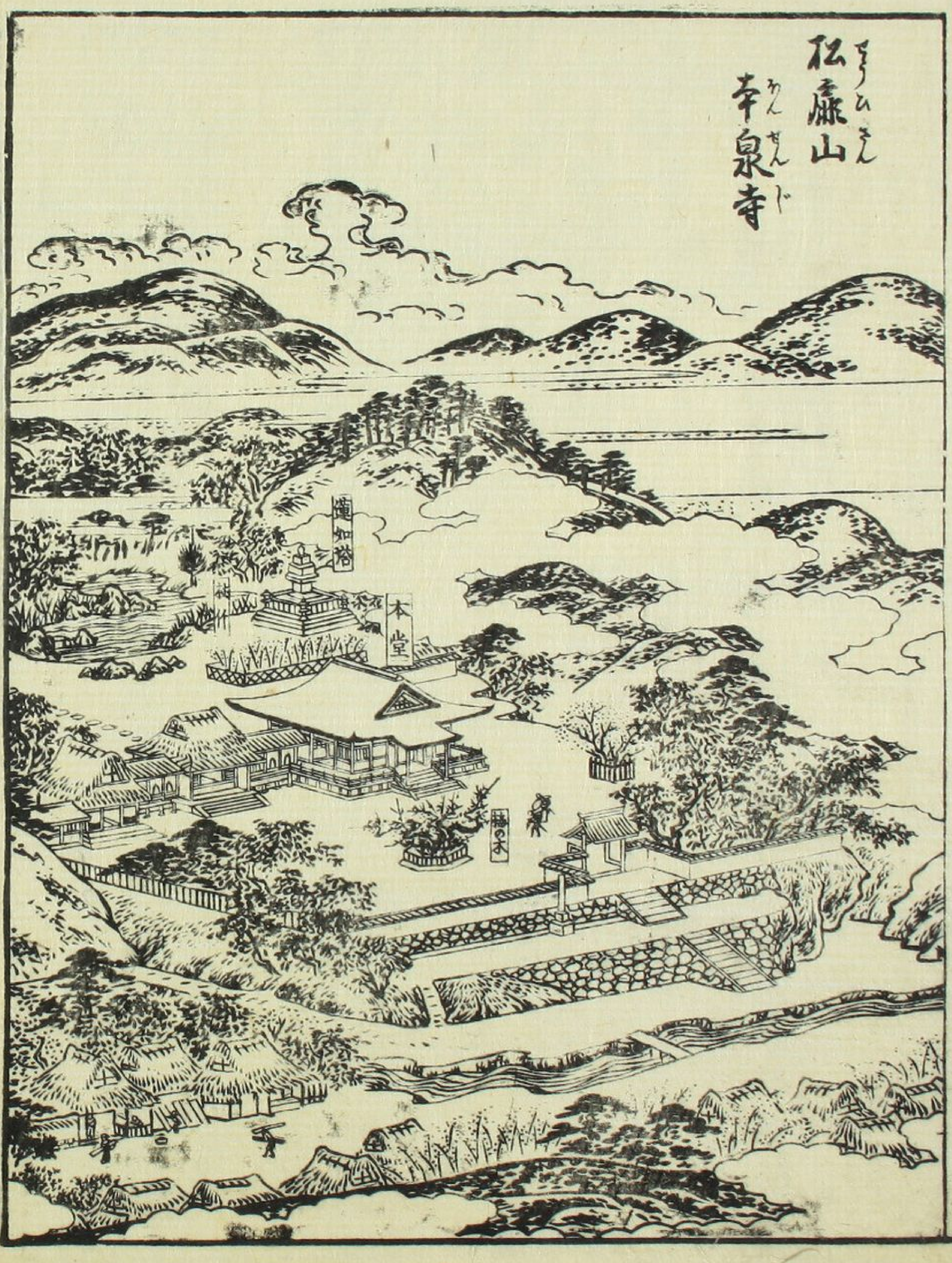
金澤東流御坊　松任より二里半
本堂二十三間四方

同　西流御坊
本堂十五間四方

専光寺　東流院家　金沢城下にあり
開基ハ信念上人本堂十三間四面本尊ハ弥陀佛にて鳥佛師の作也
○九字十字の名号ハ聖人御真筆を傳来ス

○光教寺　西流　門所江沼郡山田にあり

白山


松靡山
幸泉寺
本堂

當寺又光闡坊と号く蓮如上人の御連枝蓮誓法印の開基なり

○松扉山本泉寺 東派浄家 金沢より三里二又村にあり

當寺ハ蓮如上人開闢し給ふ霊場にして本堂九間に面○即蓮如上人自ら堀らせ給ふ庭あり又廣庭に梅の古木あり是れ蓮如上人の植置給ふ所なり

二十四輩順拝圖會巻之二終